
魍魅魍魎の主と鬼姫

美奈夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魑魅魍魎の主と鬼姫

【コード】

N6588G

【作者名】

美奈夜

【あらすじ】

奴良組に居候しているのは魑之組の組長、鬼姫だった・・・

オリキャラ紹介(前書き)

読んでおいた方が良いでしょう

オリキャラ紹介

魎之 りょうの 美水 みずい この作品のヒロインです

12歳 誕生日1/19

魎之組の組長 鬼と人間のハーフ

かなりのツンツンデレ（好きな人の前でも大体ツンとしている）

リクオ（夜）が苦手 近づかれただけで顔を真っ赤にする初心である

リクオ（夜）のことを「アイツ」・「あの野郎」と呼んでいて、リ

クオ（夜）の

話をただただで怒る（名前聞いただけで反応する）

黒い髪にこげ茶色の瞳の少女 怪力で、男勝りな性格 主にツッコ

ミ役（稀にボケ）

右目は髪で隠れている（前髪と後ろ髪の長さが同じ） 髪は結ばず

ストレート

リクオと同じ学校に通っている クラスは1年1組でリクオとは違う

鈴、光実とは小1からの親友 バラバラの性格なのに話が合う 酒豪

鬼化

髪が灰色掛かったピンクになる 少し癖毛っぽくなり髪先が所々

跳ねている

目は黄土色と黄色が合わさった感じの色になる まるで獣の様な目

になる

手は意志によって人間の手と鬼の手を切り替えられる 口を閉じて

も糸切り歯が

見えるくらいになる（いわゆる牙つてやつです）

完全に鬼化してしまうと意識を鬼に乗っ取られる（のでここから美

水の中の鬼の説明）

冷静で好戦的 美水の事を一番心配しており、美水を傷つける者は

許さない

あまり血を浴びると狂笑が止まらなくなり、敵の原型がわからなくなるまで
グシャグシャにする 鬼の正体は露水（本編でそのうちにできてきま
す）

戦法・・・基本的に蹴ったり殴ったり でも日本刀を使うときもある

魑胤 ちかす 鈴 りん

12歳 誕生日5/5

狐一舞の時期組長 妖狐と人間のハーフ

とにかく明るい性格 ほとんどがボケ でもツツコミもできる

茶色の髪に茶色い瞳 髪はポニーテールで高い所で一つに縛っている
いつでも笑ってる 食べ物が大好きで、誰にでも餌付けされそうに
なる

リクオと同じ学校に通っている クラスは1年2組でリクオと同じ
クラス
バリバリの運動派 リクオ（夜）と時々なにか良からぬことを話し
ている

リクオ（夜）を「あのお方」と呼んでいる（美水に怒られないよう
に）

狐化

髪の色は変わらず瞳が青くなる 狐の耳と尾が生えて、右目が開か
なくなる

左頬にヒゲを象った模様が出る さらに大食いになり、酒も好きに
なる

戦法・・・目を見た敵の心臓を止める（死なない程度にもできる）
短剣も使う

魑薇嗣 ちいせい 光実 ひかり

12歳 誕生日8/12

露一神の時期組長 明露清（水光龍神）と人間のハーフ

明るくて冷静な性格 ツツコミとボケの二刀流（笑）

髪、瞳共にこげ茶で髪はショートヘア

美水、鈴の監視役でもある（2人が何か仕出かさなないように）

リクオと同じ学校に通っている クラスは1年3組でリクオと違う
クラス

リクオ（夜）を「あのお方」と呼んでいる（鈴と同じ理由）

龍化

髪が黒いロングヘアになる 瞳も黒くなる 左角が生える（龍の
角です）

3人の中で一番の困ったさんになってしまう

戦法・・・大鎖鎌を使う 幻を見せて相手を精神から崩したりもする

これが私が創ったオリジナルキャラです

ちなみにリクオは家にいるときはほとんど覚醒しちゃってます（汗）

「覚醒できるときはしとけ」・・・みたいなの？（オイ

原作は堂々の無視です！

・・・ハイ、すいません 原作通りだと面倒臭いんです（コラッ！
では、本編をどうぞ！！

第一夜：美水登場！（前書き）

美水はリクオの許嫁という設定になっております
そこを承諾できる方のみお読みください

第一夜：美水登場！

静かに小鳥がさえずる・・・

・・・そんないつも通りの朝が来たある日の事・・・

「・・・アレ、なにしてんの」<棒読み

朝起きた美水は目の前でうずくまり何か作業している2人を見つけた

「あり、スイ起きちゃった？」

鈴がきよとんとした笑いで見て来た

スイとは美水のあだ名である

「つたりめーだ 人の布団の真ん前で何してやがる」

「えーとねー、みーごめんねスイ！ ほら、鈴ちゃん早く朝ご飯食べに行こう！（汗）え」

鈴は2人に鈴ちゃんと呼ばれている

鈴の言葉を遮って光実は焦ったように言った

「え、みーちゃん・・・ Z（- -） 痛い！痛いよみーちゃん

！！」

光実はみーちゃんと呼ばれている

光実は鈴の腕を鷲掴みにして黒い笑顔で鈴を見ていた

「・・・絶対なんかある・・・」

美水が感づいた時には、もう2人は食堂に早々と走って行った

・・・効果音付きで（笑）

「なんだあれ・・・ って、え？」

美水は足を見た

いつもは開けているはずの（寝相が悪いから）寝間着の浴衣が、今

日はピツチリと

閉まっている

「・・・閉める必要なくね？」

そう言っ立ち上がり、美水は食堂（大広間）に向かって行った

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

ここで少し説明しよう！

美水達は奴良組に居候しています！

食べる時に机に座る順は、

一番前に総大将

左に美水、鈴、光実、雪女、そしてその他妖怪共の順（ヒドツ！

右にリクオ、牛頭丸、馬頭丸、首無し、黒田坊、青多坊、そして）

以下同文

はい、リクオ嫌いの美水ちゃんにとっては最悪な順番ですね

なんせ学校が休みの日はリクオは朝から妖怪の姿です

美水ちゃん食事中は前を直視できませんね（アハハ

では、説明終わり！

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「あ、美水様！」

嬉しそうに美水の名前を呼んだのは雪女

「おはよう、氷麗」

美水は雪女を氷麗と呼んでいる（ここから氷麗でいきますね

「美水様！お座りください！」

「ハイハイ」

自分の席に座る美水

「おはよ〜、牛頭、馬頭」

「おっはよ〜」

「今日は遅かったな」

「今日学校休みだもん 少しくらい寝てたいんだよ」

牛頭丸、馬頭丸と笑って話す美水 そして・・・

「そろそろこの席変えてくれないかな 総大将」

「おい、喧嘩売ってんのか？」

「べ〜つに〜」

朝から喧嘩ですかお2人さん

「スイ〜、早くご飯食べちゃいなよ〜」

「うん、隣にこんな食べてる人がいると食欲なくなるね」
冷めた目で鈴のお盆の上を見る美水

お盆の上には既に食べ終わった魚の骨がわんさか（えー

「おいしいよ！？魚」

「はい、そうですね〜」

「いい も！？」

シヨックを受けつつもさりげなく突っ込む鈴

美水は気にせず目の前にある食事を食べる

目の前の人物を視界に入れないように・・・

「あれ、リクオ様、もう食べ終わったんですか？」

氷麗が立ち上がったリクオを見て驚く

「俺がここに座つてると場の空気が悪くなるからな」

そっぴいなながら美水を見るリクオ

「なんだ たまには気が利くじゃん」

たまにはの部分をかなり強調して言う美水

「お前・・・ 後でオレの部屋来い」

「えー！やd「来ないとどうなるかわかってんだろ」・・・わかつたよ」

渋々承諾する美水

前によつほど酷い目にもあったのだろう

大広間をリクオが出て行くと、美水は鈴、光実、氷麗（主に氷麗）
に質問攻めされた

「どーしたのスイ！？」

「いつものスイらしくないよ！？」

「いったい何があったんですか！？」

「何かされたんですか！？」

「いったい何をされたんですか！？」

「もしかして「っだあー！！！！」 うつつるせーなあ！！ どーでも

良いでしょそんなん「ハイ」

かなり鬱陶しそうに言う美水

「ごちそうさま」

美水はさっさと大広間を出て行ってしまった

「・・・どーしたんだろ、スイ」

「なんかげんなりしてたね・・・」

2人の声を背に、リクオの部屋へ向かう美水なのだった・・・

第一夜：美水登場！（後書き）

こんな駄文読んでいただいた方に感謝です！

第二夜：深き傷（前書き）

なんか裏になりそうな表現がありますが全く裏ではありません
本当に何もしませんのでどうぞお読みください

第二夜：深き傷

ウチがどんなに傷を負っても
アンタが気にする事はないから
これはウチの自業自得
アンタにだけは知られなくなかった
迷惑をかけたくなかったんだよ

リクオの部屋の前に来た美水

「・・・入るよ」

渋々しながら障子を開けると、中にはリクオがこつちを見ていた
「何の用だよ いきなり呼び出して」

「こつちに来い」

「？」

訳が分からないまま足をリクオの方へ向ける
そのまま歩き出して、側により座ったその時

「!?!?」

リクオの姿が消えた

そう思ったらいつの間にか後にいるリクオ

「なにして・・・っ!?!?」

リクオが美水の体に手を絡ませた
そのまま手を引っ張ったため、美水はリクオの膝と膝の間に挟まっ
て座った状態となった

「離せよ!」

もがこうと体をねじったが、顔は赤くなっている（照れてんのかね
「動くな」

耳元で低い声で囁かれ、顔を真っ赤にしてぴたつと体が止まる美水
そのままリクオは、片方の手で美水を動けないように拘束すると、
もう片方の手で美水の右足の浴衣の裾を開けさせた

「この包帯は何だ？」

「！・・・いつから気づいてたんだよ」

美水の右足には、膝から上に15cm程包帯が巻かれていた

「最初からだ　いつもより歩き方がギクシヤクしてたからな」

「・・・」

「昨日、またどつかの奴等とやり合ったのか？」

「・・・悪いかよ」

「お前がそこらの奴とやり合って、包帯を巻くほどの怪我をするか
よ」

「これはやられた傷じゃない」

「じゃあなんだ」

「・・・・・・」

黙ってしまった美水（言いたくないのでしようね

このままじゃらちが明かないとでも思ったのか、

リクオは包帯をつかみ、破ってしまった

「・・・ひでえな」

そこに見えたのは、生々しい切り傷

傷を見れば、中の肉が見えてしまっている

完全に完治していないのがよくわかる

「こんな傷に包帯だけか？」

「いーじゃん」

「昨日何があつたんだ」

「・・・最初はいつも通りだったんだよ　足に相手の毒針が刺さっ
て・・・」

毒血を抜くために血紅を使って針の刺さった場所を切っただけ

一応解毒薬の万葉酒は塗っておいたけど・・・」

血紅とは美水の剣のことだ

「・・・少しは自分の体を気遣ったらどうなんだ」
静まり返る部屋

美水は下を向いてしまつて、表情がわからない
リクオはそのまま続けた

「お前は薬師でも医者でもない　なんでそんな無茶ばっかりする
奴良組には鳩もいる　それなりの知識を持っている奴だっている
なのにお前は誰にも言わなかった」

「・・・迷惑、かけたくなかつたんだよ・・・」
「迷惑？」

「それに、ウチが怪我してるの誰かが知ったら、そいつが絶対にア
ンタに知らせるだろうし」

「そりゃそうだろうな」

「そしたらアンタ、ウチの側から暫くは離れないだろ」

「ああ」

「だから誰にも言わなかつたんだよ」
美水はそう思っていただろう

でもきつと、リクオに迷惑をかけたたくない
その気持ちの方が上だつたはずだ

「・・・」

「!？」

リクオが美水の手足を紐で縛つた

「なにしゃがる！」

「薬箱とつてくんだよ」

「手足縛る必要ねえだろ!!」

「縛らないとお前逃げるだろ」

「・・・チツ」

舌打ですか美水さん（汗

「そのまま待ってるよ」

「・・・わーつたよ」

薬箱をとり部屋奥へ向かうリクオ

第二夜：深き傷（後書き）

アハハ・・・ 何だこれ？（ 死

ここまで読んでくださった方感謝感激です！！

次話もなるべくはやく連載いたします！！

第三夜・求める心（前書き）

なんかもうグダグダですけど、是非読んでください！！

第三夜：求める心

誰も信用できない

信用する必要もない

たった一人で生きて来た

親も誰も覚えていない

なのにアンタは踏み入って来た

やめろ

柔らかく話すのは

やめろ

ウチを心配するのは

やめろ

ウチを愛するのは

「終わったぞ」

いつの間にか怪我の手当を終えたリクオ

美水は何も反応しない

リクオは手足の紐をほどく

「もう行っていいぞ 美水」

「.....」

「.....美水？」

「！」

何も聞こえていなかったようだ
ハッとしたように我に帰る美水

「大丈夫か？ 暫くは走り回るなよ」

「・・・」

「それと・・・」

「!？」

「迷惑かけたくない、だったか？ 素直じゃないお前が、かわいい事言うじゃねえか」

わざと美水の方を見て、「かわいい」を強調させて笑う（っーかニヤツとする？）リクオ

「っっ!!」

顔を赤くしてももの凄いスピードで走って行ってしまった美水

「・・・走るなっつたろーが」

半分呆れ顔で呟いたリクオだった（アンタのせいだ

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「あっ！ スイ!!」

「どうしたの？ 顔真っ赤にして」

帰って来て安心したようにはしゃぐ鈴と心配する光実

「・・・なんでもない」

「そ、そう？でも少しせーねーねー！スイ！この問題がわかんないの！教えて!!」・・・コラ」

光実の言葉を遮った鈴に対してすかさずツッコむ光実

「ん？この問題・・・ 誰が出したの？」

「竹田先生」

「明日竹田先生に文句言っとけ」

「何故に!？」

「これ高校生レベル」

「・・・だから訳の分からない数式が出て来た訳だ」

「まあ、パソコンで調べればわからん事もないけど」

「マジ!? スイ、調べて」

性格が性格なだけに（コラ

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「ここに残ってるよ 結構朝食食べるの遅かったし」

「? じゃあ、ウチら昼食食べた後、買い物行くけど、それは？」

「・・・やめとく」

手当てしたばかりの足でそこらを歩けない事は美水自身よくわかっている

「じゃ、4時までには帰って来るね」

「OK」

笑顔で2人を見送った後、暇つぶしにパソコンで曲を聴いたりアニメを見たりする美水

それから数分後、いきなり体が固まる美水

『・・・この妖気・・・』

そう思った時、障子が開いた

「大食いのお前が、昼飯抜いという、我慢できるのか？」

「・・・出てけ変態」

「誰が変態だ しばくぞ」

そこにいたのは、昼食を持って立っているリクオだった

「ここに置いて行くぞ」

「・・・」

「・・・（ボソツ かわいくねーな」

「!!!! っほっ↑けコノヤロー!!!!」

「顔、赤いぜ?（ニヤ」

「ウルセー!!!!」

また喧嘩する2人なのでした（汗）

第三夜：求める心（後書き）

・・・アレ？

全然鈴ちゃんと光実ちゃん出て来てないですね

まあ、題名が「魑魅魍魎の主と鬼姫」ですから
魑魅魍魎の主は、リクオ

鬼姫は美水です

次話では美水の過去を連載します
それではっ

第四夜：戦場の華（前書き）

はい、前に予告した通り、美水の過去話です
グダグダですが、読んでやってください！

第四夜：戦場の華

ただポツリと座っていた
味方のいないその場では
幼子は弱すぎる

幼子には鬼の加護
近づく者は皆殺し
だから

勘違いするな

私はこの子を守るため
お前らを使っただけだ

今から8年前

大きな妖怪戦争があった
その結果

奴良組が勝利を手にした
だがその戦場には
幼き鬼の子がいることを
誰も知りしなかった

黒田坊、首無しは、戦場に敵軍の生き残りが
いないかを偵察に行っていた

「いないね・・・ 生き残り」

「では、そろそろ戻るとするか」

「そうだな・・・！！？」 いや、ちょっと待て

あそこに人影がある！」

「なに！？　だが・・・あの姿は・・・」
2人が見つけたのは、しゃがんでいる幼い子供だった
そして、その子供は鬼の目をしていたが、2人は気づかなかつた
「まだまだ子供ではないか・・・ん？なんだ、この帯
何か術式のようなものが書いてあるぞ」
「とにかくこの子を総大将の所に連れて行こう」
2人が子供に触れようとした
その時だった

バチツ！！

手に電流が流れたのだった

「！？　なんだ！？」

「この子供・・・意識があるのか？」

2人がそう言った瞬間
目が合った

「なっ・・・」

『お前らは奴良組の者か？』

「なんなんだ！　お前は」

『質問に答えろ』

「確かに奴良組の者だ」

『クク・・・そうか・・・』

あの総大将のねえ・・・』

「お前の名前はなんだ！」

『私の名前？　お前達のようなガキに言っても意味はない・・・』

だが・・・この子の名前は美水だ・・・』

「この子・・・？」

『総大将に伝える・・・この子を・・・』

美水をよろしく頼む・・・と・・・』

「お、おい！　お前・・・」

ドサッ

幼子は倒れていた

その小さき身を、2人は運んで行った

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「雪女！」

「はい・・・！？ どうしたの2人共！」

その子供は！？」

「わからないけど・・・ 美水と言うらしい」

「とにかくその子をかしてください！ 傷はないから良いけど・・・

とにかくお風呂にいれてきます！」

2人は思い出した

雪女が世話好きだという事を

「それでは！ 2人は総大将に美水のことを伝えてください！」

雪女はそれだけ言うと、さっさと美水を風呂場に連れて行ってしま
った

「・・・行くか、首無し」

「はい」

少し空しくなった2人だった（笑）

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「汚れててわからなかったけど・・・ 綺麗な髪ね・・・」

美水の頭を優しくしっかりと洗っていく雪女

「さてと、後は髪を拭いて・・・」

美水の髪を丁寧に拭くと、元々来ていた服を美水に着せた

「この子服が綺麗だったのよね・・・ なんでかしら？」

疑問に思いつつも手を動かしていた

その時だった

「・・・う・・・」

美水の目が覚めた

「あ、大丈夫ですか？」

「・・・誰・・・ここは・・・ いたい」

「ここは奴良組です あなたは戦場で倒れていたそうですよ」

「・・・戦場・・・ ! そうか・・・」

「？」

頭に？が浮かぶ雪女

それをよそに、1人でさっさと奴良組の外に向かおうとする美水

「あ！ そっちは・・・」

外に出たとたんもの凄い妖怪の数

「・・・どけ」

「総大将の命令だ！ お前を好き勝手させないようにとな」

「・・・チツ どけて言っただよ・・・」

「できん！」

『どけと言っのが聞こえないのかい？』

「！」

「・・・どーした？」

「ちよつと！ まだ帯をちゃんと締めてません！」

「別にいいよ」

雪女と美水が話していると、子供の声が聞こえた

「みんな！ なにしてるの？」

「あ、リクオ様!!」

そこに居たのはリクオだった

「・・・リクオ？」

「はい、総大将の孫です！」

「・・・ふーん」

「雪女！ その子誰？」

リクオは物珍しそうに美水を見る

「美水と言っらしいのですが・・・」

「美水でいいよ」

「へー、美水かぁー」

その時だった

「美水様!!!」

声が聞こえた

「・・・魄龍」

声の聞こえた方を見ると、銀色の髪に灰色の目をした、美青年だった

「ご無事でしたか!」

「無事も何も・・・」

「あなた方が預かってくれていたのですか!? ありがとうございます
ます!!!」

「え・・・!? いえいえ、そんなことは・・・」

「美水様、帰りましょう」

「まちなさい 魄龍」

美水は鬼の目をしていて

何事にも動じない、しつかりした目を

「ろ・・・ 露水様・・・」

「露水?」

『魄龍、この子を奴良組に預けなさい』

「・・・何故ですか?」

『この子を守るためよ』

「わかりました 皆さん、自己紹介が遅れました

わたしは魍之組の幹部、魄龍と申します」

「魍之組!? 魍之組って、鬼神の・・・」

「そしてこの方は、魍之組組長、美水様です」

「えっ・・・」

『総大将に会わせる』

「い、今すぐ呼んで来て・・・」

「その必要はない」

そこに居たのは、妖怪の総大将である、ぬらりひょんだった

「話は首無しと黒田坊から聞いておる 美水はワシが責任を持って
預かる」

『そつ』

「ここに預けるといふ事は、美水をリクオの許嫁にする・・・
そついうことになるぞ」

「……ええ!?!」「……」

「じーちゃん!?!」

『わかつている だからこそ、ここなのだ』

私はもうこの子の体に負担を与えたくない

このような小さな体では、負担を与えてしまう』

「露水様……」

『私はもう行く 頼んだぞ』

一瞬美水の後に、女性が見えた

憂いを帯びた、悲しき瞳をしている 美しい人だった

「……? どうしたんだ 魄龍」

元に戻った美水

「ねっ! 美水!」

そこで一番最初に話しかけて来たのがリクオだった

「……何?」

「美水、僕の許嫁だつて!」

「……魄龍?(黒笑)」

「あ、あの、美水様は今日からここに住む事になりました

それで、美水様はこの次期総大将の許嫁になる事が決まったん

です」

「……ハイハイ、わかりましたあ」

いきなり性格が変わった美水

きつと今ので疲れが吹き飛んでしまったのだろうか(気が抜けた?)

「お前達はうまくやれよ、魄龍」

「はい」

「後、ウチがない間は、お前が頭だ 魄龍」

「え!?!」

「組長命令」

「・・・わかりました」

そう言つて退けてから、後ろを振り返り雪女を見る美水

「これからよろしくな 雪女」

「ハイ！ よろしくお願いします！ 美水様！！」

「・・・様？」

「なんせリクオ様の許嫁ですから！」

「・・・（絶対やめない・・・な）」

こうして美水は奴良組で生活する事になった

そして美水は、鈴、光実と出会い、大切な者を守るためにも強くなつていった

第四夜：戦場の華（後書き）

なんか最後らへん適当だ・・・

読んでくださった皆様！ありがとうございます！！
できれば感想書いていただけると嬉しいです！

（催促してんじゃねえ！）

第五夜：離れたくない（前書き）

今回も美水とリクオしか出てきません

この2人が進まないと話も進まないんです
すいません！！（スライディング土下座）

第五夜：離れたくない

必ずお前がそばにいる
だから安心できるんだ
出て行く事は許さない
お前は大切な奴だから

いつでもアンタと言い争える
それだけ平和な毎日
だったらウチは願いたい
少しでもこの日々が続く事を

「……………」

「……………」

「……なんだよ(怒)」

「なにが」

「なんでこの部屋から出てかないんだよ」

「別に？ ただ…… お前の反応が面白いから」

「出てけー！！！！」

「ほら、面白い」

「黙れ……………」

美水の部屋に食事を置いた後も出て行かないリクオ
リクオがずっと自分を見ていたため、ぎこちない食べ方をしながら
とうとう切り出したが、逆効果だった

「ごちそうさまっ！！」

「はええな」

「オメーが見てたらゆつくり食べねえんだよ!!」

「少しは素直になれよ さつきみたいに」

「煩ーい!!!」

はい、リクオ君

からかうのが楽しいからって、やりすぎちゃダメだよ (オイ

「なんでお前のいる家になくちやいけないんだよ」

「オレら婚約sy「黙れ!!!」照れてんのか？」

「お前のそういう所が嫌いなんだよ!!!」

「オレはお前のそういう所が好きだけだな」

「あー!!! またそんな事言う!!!」

軽く好きと言って退けるリクオにイライラする美水

「一応両思いなんだけどな」(美水に殺されるよ?)

「好きって言うのは、本当に好きな奴に言えば良いだろ!!!」

「・・・例えば？」

「え、・・・カナ？」

「アイツは幼なじみだけだ」

「カナはお前の事好きなんだから、いいじゃん

カナかわいいし」

「本気で言ってるのか？」

「うん、本気・・・何だよその怪しげな顔」

「お前、焼きもち焼いてんのか？」

「なっっ!」

リクオ君 言っちゃいました

禁句言っちゃいました

「焼きもちなんか焼いてねえよ!!! お前出てけよ!!!」

「オイ、鬼化してるぞ 目が」

「ぶっ殺すぞてめえ!!!」

思いつきり目が鬼化している美水

怒り過ぎです いくら何でも

「お前にオレは殺せねえよ」

「・・・お前大嫌い」

「知ってる」

最後は少し場の空気が和んだりしました

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・あれ？」

いつの間にか寝ていた美水

「起きたか」

「・・・この状況を簡潔に説明してみろ」

美水はリクオに膝枕をされている状態で寝ていた

「お前が勝手に寝たんだよ 膝の上に」

「は？」

「っーか倒れて来た」

「・・・ウチこの家出てく」

「無理だな」

「なんで」

「オレが許さない」

「なんでお前の許可を取る必要があるんだよ」

「オレが今の組長だからに決まってるんだろ」

「ああ、そうだったな これでも魑魅魍魎の主だもんな」

「お前だって、それでも鬼姫だよな」

「姫言うな」

「じゃあ、魍之組組長」

「お前ムカツク」

いつまでもくだらない言い合いを続けている2人なのでした

第五夜：離れたくない（後書き）

喧嘩してる2人が大好きなんです（ごめんなさい

2人は両思いです

リクオはわかってるけど、美水はわかってない

そんなもどかしさ書いてて、こっちの方がイライラしました（汗
思いきって今度どっちからか告白させようかな・・・

第六夜：鬼と精木（前書き）

はい、この話始まって以来の戦いです

美水は前の話からずっと寝てたという事にしておいてください

精木はくせいぼく>>と読みます

グダグダな戦闘モノでも許す！という心優しい方はお読みください

第六夜：鬼と精木

お前はいつの間にかきえていた
あの場にいなかった

ごめん

助けられなくて

ごめん

気づいてあげられなくて

ごめん

今

助けに行くから

胸騒ぎがする

大きな妖気も感じられる

近い

近い

お願い

助けて

お願い

スイ

ウチはもう

逃げられないよ

「……………イ…………… ス……………イ スイ!!」

鈴が美水を呼んでいた

「あ…… 帰って来たの」

「あ、なんだ 寝てただけか」

「うん…… ねえ、二人共」

「「ん？」」

「ウチ…… 出かけて来る」

「八へ？」

「なに言ってるの？ 外もう真つ暗だよ」

光実が言った通り外は吸い込まれそうなほどに黒かった

「行つて来る」

「え、ちよ、美水!？」

鈴の声も空しく、美水は闇の中へ消えていった

「…… 鈴ちゃん、この事……」

「…… 知らせた方が良いかな……」

「スイはきつといやがるよ」

「じゃあ、あの2人に知らせよう」

「…… ウチは牛頭」

「じゃあウチは馬頭」

2人は牛頭馬頭を探しにいった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「…… ここ、か……」

見上げなければ見えない建物を目の前に、美水は呟いた

古びた扉を開けると、そこには百を超えるであろう妖怪の数

「侵入者じゃー！ー！！！」

「捕えろー！！」

「捕えて頭に差し出せー！！！！」

一斉に攻撃しようとするこちらに向かって走って来る

「雑魚に付き合ってる暇は……」

ザシュッ

「そうなんだよ．．．いきなり飛び出しちゃってさ．．．」
「アイツらしくねえな」
「でしょ〜？」

牛頭丸にことを知らせた光実

いつの間にか光実のグチを牛頭丸が聞いてやる形になっていた

「スイはいくら止めろって言っても酒飲むの止めないし．．．」

「豪酒で酒好きだからな」

「学校でもほとんど寝てるし．．．」

「低血圧だしな」

「運動大嫌いだし．．．」

「それはお前も同じだろ」

「無防備だし」

「．．．それは困るよな」

やつと終わった

心底ほつとした牛頭丸だった

//*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*

何年ぶりだろうか

こんなに妖怪を殺したのは

もう血の匂いしかない

否

血の匂いがきつ過ぎて他の匂いに鼻が反応してない

「『最後に前前に聞いておく』」

「な．．．んだ．．．」

「『お前らの頭はどこにいる』」

「へっ．．．．．一番上に．．．」

息絶えた

「『一番上．．．か』」

階段を見る美水

「『待つてるよ．．．必ずぶっ殺してやる．．．』」

友を見つけた

それは

狐と龍と

精木だった

第六夜：鬼と精木（後書き）

えゝ・・・

美水が妖怪達を切った場面は、

銀魂の103話の沖田とイメージ合わせていただければぴったりです

（沖田が隊士たちを切って行ったシーン）

こんなグダグダな話読んでいただいて感激です！！

華慧菜はくかえな>と読みます

それではっ

第七夜：愛してほしい（前書き）

はい、とにかくグダグダです
最後辺り特にグダグダです
自分の文才のなさにガツカリです
それでもOK！ バッチコイ！！
という人はどうぞご覧ください

第七夜：愛してほしい

今更かなわれないと思うけど
もしもかなうなら

また貴女と

たわいもない会話がしたい

どんなに中身のない会話でも良い

貴女のその優しいぬくもりが

貴女のその優しい声が

貴女のその優しい瞳が

恋しくて仕方がない

アンタが思っているほど

ウチは優しい人間じゃないんだよ

「『ここもはずれか・・・』」

頭が気持ち悪い

吐き気がする

目眩がする

美水は追い込まれていた

このまま自分で鬼を押さえられていられるのか

また何かの拍子に鬼神になってしまったら・・・

恐ろしくて仕方がない

「『華慧菜・・・』」

さつき敵に切られた目から血が流れて来た

「『チツ・・・ほとんどいかれてる・・・』」

美水の左目は失明したと言っても良いほど何も見えなくなっていた

「『なんなんだよ・・・畜生・・・!!』」

その時だった

頭の中で声が聞こえた

『大丈夫よ』

「！」

『貴女が苦しいときは私が守ってあげる

貴女が悲しいときは私が慰めてあげる

大丈夫よ 私が愛してあげる』

「あ・・・嫌・・・!!」

『だから』

「やめるおお!!!!」

『その体を私に預けて』

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「!! 美水・・・?」

「ほう 鬼に吞まれたか」

「な・・・ 美水!!」

「ここから声は聞こえない」

「美水! 美水!! スイ!! しっかりしてよ!!!!」

「おい、いい加減に・・・」

「スイ!!」

「僕も行くー」

「つたりめえだ」

そんな元気たつぷりの4人を見守っていた人物がいる事を
4人は知らない

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・やつと来たな 露水」

「せつかく面倒見てやってたのに、全く

恩を仇で返すとはこの事だねえ」

「そんなガキの姿で言っている、ムカツクだけだな」

「・・・この子をいつまでもガキ扱いすんじゃないよ 茨銅羅

この子だってもう立派に組長だ」

「ハツ 冗談だ

まさかあの生意気なガキが、そんなに立派な美人になるとはな

予想外だ」

「・・・予想外デース？」

「殺すぞお前」

「無理なくせに」

何気にボケながら余裕を見せる露水

「この子の友達、返してもらおうか？」

「アイツは人質にすぎん

もういらんわ」

「ずいぶんと侮辱してくれるね・・・

ガキ？ お前だつてガキだろう」

「オレは妖怪だ そいつとは違う」

「どうかねえ・・・」

一瞬

風が吹いた

「・・・！！！！」

「ほら こぼれてる」

「『待たせたな 茨銅籬』」

「・・・美水、か」

「『華慧菜はどこだ』」

「フツ・・・ 愚問だな」

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・これで・・・ いける・・・」

華慧菜は2人の様子をそつと見ていた

「スイ・・・ ありがとう・・・」

うれし泣きか 悔し泣きか

「ハハツ・・・ 華慧菜つていっつもスイに守ってもらってばっか
だったね・・・」

学校でいじめられたときは、華慧菜を慰めてくれたし

次の日いじめられる事なんてなかったっけ

華慧菜はいっつも弱気で こんな奴が組長になれるかなんてよく言
われたけど

スイはそれを言った人達に ただ一言

「あんたらよりも立派な組長だよ」

つて言ってくれたよね

スイ

スイはそんなつもりないかもしれないけど

華慧菜は

いっつもスイに

救われてました

「さよなら スイ」

「ありがとう」

「『!?!』」

「な・・・これは・・・」

「『華慧菜の術・・・』」

茨銅鑼の足下から生えて来た植物が
茨銅鑼に絡み付いていく

「『・・・!!』 喪心同殺・・・!?!?』」

「な・・・なんだそれは・・・」

「『! 華慧菜!!』 いるんだろ!? ウチなら大丈夫!

アンタが・・・ 華慧菜が・・・

カエが出てくる事ない!! そんな奴のために自分まで死のう
とするな!?!』」

喪心同殺・・・

相手を殺す代わりに

自分も死ぬという
一度植物に捕まったら
相手は逃げる事ができない
それと同時に
術者も死から逃れられない

「ぐあ……!!」

「『チイ……!!』」

美水は刀を抜いた

そして

「ガハアツ……!?!」

茨銅鑼の体を

植物ごと切り裂いた

「『アンタの体 だいぶ植物に生気を抜かれてるな
……次で終わりだ!』」

美水の片手が

茨銅鑼の心臓を貫いた

「！ 馬鹿な！ お前などにオレが殺されて・・・

許さんぞ！！ 殺す！ 殺す！」

「『・・・いつまでも』」

「ウチは生意気なガキじゃないよ」

「鬼まで引つ込めて・・・オレを・・・

どこまでなめているんだ！！」

「さっさと死にな」

「その汚い血が目障りなんだよ」

「カエ！」

美水は死んだ茨銅鑼を踏み台に

カエがいるであろう壁にまわった

「ス・・・イ・・・」

「しっかりしな！！」

「やっと会えたね・・・スイ」

「そうだよ・・・ やつと会えたのに・・・

何死にそんな顔してんだ・・・」

「？ スイ？・・・なんで・・・泣きそんな顔してるの？・・・」

「いつまでもウチに頼ってんじゃないよ

今度は」

「ウチが後押しするだけだ」

「！」

「スイ！！」

「いた！」

「みーちゃん・・・ 鈴ちゃんも・・・」

「あれ！？ カエ！！」

「カエ！ どーして！？」

鈴と光実がいきなり飛び込んで来た

「2人共」

「何？ スイ」

「手伝って」

「OK」

「・・・再生魂身」

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「無茶しやがって・・・」

「リクオ！？」

「あれ、もしかして気づいてた？」

「あたりめえだ」

華慧菜は死んではいなかった
なくした魂が戻っていた

「フエ！？ リクオ君もうちょっと子供っぽかった気が・・・」

「覚醒してんだよ（汗）」

「相変わらず馬鹿だね カエ」

「え！？ ちょ、2人とも酷い！」

笑いながら話す鈴と光実に見顔を抗議する華慧菜

「美水をかせ」

「あ、ハイ」

倒れて寝息をたてている美水をリクオは軽々と持ち上げた

「お前達は歩けるか？」

「もっちー！」

「今来たばかりだし」

「華慧菜も歩けるよ」

「そうか」

「・・・あ？」

鈴がハツとしたように辺りを見回した

「牛頭と馬頭は？」

「あいつらは先に帰らせた

今頃手当の準備でもしてるんじゃないか」

「ほ」

「準備良いのね」

関心する鈴と光実

「華慧菜はどうしよ・・・」

「え？一緒に帰ろうよ」

「そっだよ」

「え？え？」

「お前、美水の友達なんだろう？」

「あ、はい」

あわてて頷く華慧菜

「だったら来いよ」

「でも・・・」

「こいつもよろこぶ」

美水に視線を落とすリクオ

「いいな？」

「ハイ！」

茨銅鑼の基地を後にして

5人は家へと帰って行った

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

リクオは横になって寝ている美水の横で

読み取れない表情で美水を見下ろしていた

(こいつはいつも自分一人で無茶をする)

「・・・ん・・・!!」

目を覚ました美水はリクオがいるのに気が付き

布団を蹴り飛ばして5m程飛び退く

「んなに離れるこたあねえだろう」

「・・・! 痛っ・・・」

「まだ怪我が完治してねえんだ

大人しくしてる」

「・・・」

「あと」

「？」

「あんまり無茶すんな」

「はあ!？」

「平気なフリしてればバレないとも思ったか？

バレバレだ」

「・・・っ」

思わず顔を赤らめ後ろを向く美水

そんな反応をリクオは愛しいと思っていた

「なにかあつたらオレに言え

お前は一人じゃないんだ」

「・・・鬼に」

「鬼？」

「お前を愛しているのは私だけだって言われた」

リクオは思わず目を見開いた

美水の顔はとても辛そうだった

「ウチは誰にも愛されていない気がして・・・」

素直じゃない性格も愛想がないのもわかってる

それでも誰からも愛されていないと考えただけで・・・」

「辛くて仕方がないんだ」

「・・・悪い アンタに話した所で何の意味もない」

「お前は」

「・・・何だ」

「皆に愛されてる」

「・・・っな、」

「何照れてんだ？」

「笑うな!!」

その瞬間

「!?!?」

美水はリクオに抱きしめられていた

「ちょ、おま、何して！ 離せよ！..」

「動揺しまくりだな」

「う、るさいっ！！」

「俺はお前が好きだ」

「嘘言っなよ！」

「どうしようもないくらいに好きだ

お前を見たときからずっと」

「.....！」

「だから」

「.....なんだよ.....っ」

「心配するな オレがお前を愛し続ける」

「な...に、恥ずかしい台詞さらっと言ってたんだ、よっ」

「オレが守ってやるよ」

「..！」

『私が守ってあげる』

第七夜：愛してほしい（後書き）

・・・ね？

グダグダっしょ？

長過ぎますしね（汗）

最後のシーンが書きたいが為に書いてしまった
そんな小説です

ここまで読んでくださった人

本当にありがとうございます！！！！

またまたオリキャラ紹介！

魅笹白 みのしら 華慧菜 かえな

12歳 誕生日9/25

魅笹白族時期組長 精木と人間のハーフ

6歳から12歳までずっと茨銅鑼に捕われていた

美水とは姉妹のような関係（でも本人微く『親友』）

穏やかな性格で良い子

良いこ過ぎて人に反論できない

リアクションがいちいち大袈裟（美水は喜んでいる）

黒髪天然パーマで、いつも髪をポニーテールにしている

瞳は美水と同じでこげ茶

漫画やアニメの話でよく美水と盛上がる（かなり）

リクオ達と同じ中学校に通う事になり、クラスは美水と一緒に

リクオの事は普通にリクオ君と呼んでいる

妖化

なぜか周りがマイナスイオンが出ているかの様に涼しい（美水は寒
いと言ってますけどね）

瞳が碧翠色になる

声も何かエコーがかかっている感じがする

基本的に周りの植物を使って戦うが、生き物だったら大体使える

自分で植物をつくって使う事もある

はい

ではここでちょっとしたお話を書きます（文字稼ぎかコノヤロー

美水〓美 鈴〓鈴 そのまんまとか 光実〓光 華慧菜〓華

華「今回、私のプロフィールを見てくれた皆様！ 感謝です！！」

美「よかったね〜 カエ なんか妖怪っぽくないけど」

鈴「なんか妖精って感じだよね」

光「妖名が妖名だけにね」

華「え、ちよつと 華慧菜だって立派な妖怪だよ！」

鈴「うーん・・・ まあ、確かに・・・」

光「立派っちゃあ立派だけど・・・」

美「ほら、2人共！」

鈴・光「ハイ？」

美「カエを泣かせないの」

鈴「・・・ごめんね？カエ」

光「だからさ、立派だよカエは」

華「いいよ2人共 無理しなくても・・・」

確かに華慧菜立派じゃないし、幼稚だし

いちいちリアクション大袈裟だし

幼児体形だし 天パだし

漫画大好きだし アニメ大好きだし」

美「・・・コラ ウちに該当すんのがいくつかあんじゃないかよ

鈴「ハハ」

光「ほら、カエ 最後に」

華「あ、うん！」

美「立ち直りはえ〜」

華「ここまでこの小説を読んでくださった皆様！」

「これからも」の小説を

「よろしくお願いします…！」

第八夜：うた 歌 唄（前書き）

題名の意味が分かるのはきつと話の後半です（汗
華慧菜がメインとして出てくる初の話ですので
どうぞお読みください！

第八夜：うた 歌 唄

体が怠い

この状態じゃどこにも行けない

左目も見えない

なのに

アンタらは

ウチに学校に行けと？

「・・・え」

「え、スイ そんなに明らか様にイヤそうな顔って・・・」

「君らウチの状況わかってマスク？」

「えーとね、昨日の怪我の為左目は暫くの間視力は回復せず
足に深い切り傷を負っていた為一週間は一人で歩かない事

もしもの為に二週間は安静

ちなみに昨日リクオに告白され心臓はバツクバ「それはいい」以
上！」

「そーだよ鈴ちゃん やればできる子なんだからその事をちゃーん
と勉強に

生かそうねーって、わかってんじゃねえか！！無理矢理行かせよ
うとするなよ！！

つーかなんで昨日の事知ってたでめえええ！！！！

「盗み聞きした」

「フザケンナアアアアア！！！！！！」

ガラッ

「えーっと・・・スイ、学校どうする？」
「行く」

「行くんじゃない！！！！」

「だってカエ心配だし」

朝から騒がしい美水達の部屋

既に制服に着替えている3人と違って、美水は動くのも体力を使っ
てしまうため無理だった

「ん、じゃあがんばって制服着なきゃね」

「いや、制服着るくらいなら大丈夫

多分」

「手伝おっか？」

「へーキ」

「ほらね？」

なんだかんだ言っつて結構早く着替えた美水だった

その時

「早くしないと4人とも、遅刻しちゃうよ！」

「あ、マジ？ 気付かんかった」

「れーい」

「「おねがいしまーす」」

「着席」

ガタガタ

（気をつけの時効果音おかしくね!?!）

一人で考えていた美水

「今日は転入生を紹介します どうぞ入って来てください」

「あ、ハイ」

美水は前を向いた

「えっと・・・ 今日からこのクラスに通う事になった

魅笹白 華慧菜です お願ひしますっ」

ペコリとお辞儀をする華慧菜

「じゃあ、魅笹白さんの席は・・・あの席です」

そう言つて先生が指差したのは

美水の隣の席だった

（いくらなんでも都合良過ぎるんじゃない?!?!）

そう思つて華慧菜は美水の方を向いた
すると

コネ

確かに美水の口はそう動いた

（スィーイー!!）

嬉ながらも頭の中で絶句する華慧菜だった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

あつという間に授業が終わりもう放課後（はやっ

「スイ〜 帰ろー」

「おー・・・なるべく早くね」

「え？」

「妖怪ワカメがやって来るから」

「妖怪ワカメ!?!」

その時・・・

「魍之くん!」

「やべっ! 来た!」

来たのは清継だった

「今日こそはクラブに参加してもらおうよー!ー!ー!ー!」

「誰が参加するかこの成金妖怪ワカメがー!ー!ー!」

「誰がワカメだー!ー!ー!」

「怪我人走らせんなコノヤロー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

「君がクラブに参加すれば良いだけの話だろー!ー!」

言い争いながら学校の中を走り回る2人

「ウチー応美術部だからー!ー!ー!」

そう言いながら清継に向かって回し蹴りを繰り出す美水（ええっ!

ドゴツ

「帰ろっか」

後でぶっ倒れている清継をよそに

固まっている華慧菜の手を引っ張って家に帰る美水だった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「あー 気持ちー」

家に帰って早々風呂に入る美水と華慧菜

「入っても大丈夫なの？スイ」

「うん 問題ないって鳩が」

伸びをする美水

「おっじゃまー！」

「入るね」

「お、いいよいよ」

光実と鈴木も風呂場に入ってくる

「あ、スイ 今日逃げたでしょ」

「ズルイ」

「あんな奴に捕まってなるものか」

「あー、確かに」

「えーと・・・スイ？」

ちよつと言いくそうに華慧菜が美水に話しかけた

「何」

「あ、あのさ・・・ 髪、洗うの手伝う？」

「マジでか」

「そんな長かったら大変でしょ？」

「そーだね じゃあ手伝って 明日髪切るわ」

「・・・マジでか」

「ありがとう」

髪を洗い終えて再び湯船につかる美水と華慧菜

「ねえねえ、スイ」

「なんじゃい みーちゃん」

「人柱ア ス 歌おうよ」

「いいよー カエもね」

「はーい」

「じゃあその次に暗い のサー ス歌おうか」

「OK」

「じゃあいつその事その次に のこたえ歌おうか」

「・・・なんか」

「会話文の中 多いんだけど・・・」

一人考える鈴だった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「すつきりしたー!!」

気持ち良さそうに良いながら部屋へ帰ろうとする美水

「あ、そうだ」

何か思い出したかのように後ろを振り返る

「久しぶりにあの2人の部屋行こっかな」

そう呟いて駆け出した

「牛頭ー！ 馬頭ー！」

「あ、スイ〜」

「どうしたんだお前 やけに機嫌いいな」

「あ、そお？ いやさ、2人の部屋久しぶりに覗きにこようかと思
いましてね」

そう言つて部屋を見渡す美水

「相変わらず何も無い「お前人の事言えねえだろ」「ごめん」

牛頭丸にすかさず突つ込まれる

「でもウチの部屋は漫画とゲームですごい事になりそうですが？」

「それ言うならこの部屋だつて・・・」

そう言つて何か言いたげに馬頭丸の方を向く牛頭丸

「ん？ なぁに？」

頭の辺りから花が飛んでいるように見える馬頭丸

「あ・・・、言いたい事はわかつたよ 牛頭」

「え、なにになに？ 何の話!？」

「んー、とね 馬頭もついっその事そのかぶり物とれば良いのにつ

て話」

「見てることちが暑苦しいからな」

「え!？」

「ハハハ 冗談 じょーだん」

笑い飛ばす美水

(この部屋が馬頭の玩具でほとんど埋まりそうだななんて ぜってー

言えねー)

心の中で思う美水だつた

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「フー 今日も一日がんばつた!」

縁側に腰掛け自分をほめる美水

「・・・あ、リグレッツ メッセージ聞きたくなって来た」

不意に聞きたくなった曲名を呟く(ここでも かいな)

「・・・・・・・・」

「街はずれの小さな港 一人ただずむ少女」

「この海に昔からある ひそかな言い伝え」

「・・・で、何ワンコーラス熱唱してんだウチ」

歌い終わってから我に帰る美水

「思いつきり歌ってたな」

「!!!・・・なんでいんの」

「ここ、オレの家だぜ？」

「そーゆーこと聞いてたんじゃなくて・・・

つーか歌聞いてたわけ？」

「ああ、最初からな」

「何時からいた」

「お前が自分ほめてるところから」

「・・・っ！／＼」

本来なら逃げ出す所だが、

体があちこち痛くて逃げれない

「歌、上手いんだな」

「嫌い」

「嬉しいくせに 素直じゃ無えな」

「嫌いっ」

暫くの沈黙

リクオは美水の隣に座った

「・・・何座ってんだよ」

「いいだろ？ 普段ならお前に近づけねえんだからよ」

「・・・」

「お前、色白だよな」

「だから何だ」

「鈴木光実も日焼けしてるぜ？」
「・・・ウツサイ」
「身長は普通・・・か オレより低いけどな」
「黙れっ！」
「・・・気にしてんのか？ オレより低い事」
「昔はウチの方が高かった！」
「・・・」
「な、なにニヤついてんだよ」
「お前、やっぱ性格はガキだな」
「にゃっ！」
「・・・お前は猫か」
「ガキじゃねえ!!」
「ガキじゃなかったら負けず嫌いだな
すぐ張り合おうとする」
「そ、そんなこと・・・あるか？」
「自覚してんのか」
「ここからいなくなれお前」
「自覚してねえ方が怖いしな」
「話を勝手に進めるな!!」
「・・・さっきの歌」
「!?!」
「もう一回 歌えよ」
「・・・はあ!?!」
「お前の歌声が聞きたい」
「っ・・・わかったよ」

街はずれの小さな港

一人ただずむ少女
この海に昔からある
ひそかな言い伝え

「願いを書いた羊皮紙を
小瓶に入れて
海に流せばいつの日か
思いは実るでしょう」

流れていく ガラスの小瓶
願いを込めたメッセージ
水平線の彼方に
静かに消えていく

君はいつも私の為に
なんでもしてくれたのに
私はいつもわがままばかり
君を困らせた
願いを叶えてくれる君
もういないから
この海に私の思い
届けてもらうの

流れていく 小さな願い
涙と少しのリグレット
罪に気付くのはいつも
全て終わった後

流れていく ガラスの小瓶
願いを込めたメッセージ

水平線の彼方に
静かに消えていく

流れていく 小さな願い
涙と少しのリグレット

「もしも生まれ変われるならば

」

美しい歌声

月に照らされ いつもよりも白く見える肌
まつげの長さがよくわかる横顔
全てが印象的で

「・・・綺麗、だな」

「?・・・なんか言ったか」
「いや」

「これで満足か?!? もう部屋に戻るぞ」

「次、機会があったときは」

「・・・なんだよ」

「お前の『唄』も聴かせてくれよ」

「っ!?!? あ、あれは自分の旦那に聴かせるもので・・・」
「だから」

リクオは美水の耳に口を寄せた

「オレだろ？」

「お前の旦那は」

「・・・うっ・・・／／／」

目をそらして動揺を隠そうとする美水

だが、それだけで隠しきれぬ動揺ではない

「ここにいる以上 その事実は変わらねえぜ？」

「・・・お前なんて夜雀に触れられたままだったら良かったのに」

「その時、オレから夜雀の妖気を抜いたのは誰だ？」

「・・・ウチだけど・・・」

「じゃあ、本当はそうは思ってたねえ訳だ？」

「あ、あの時と今は状況が違っただろ！」

「・・・」

「うお!？」

リクオは美水の腕をひいた

そして

チユツ

「・・・え？」

呆然とする美水

一瞬頬にあつた柔らかい感触

「んなに素直じゃないと」

「いじめたくなんだろ？」

「くっ！ このサディストがああああああ！！！！！！」

ものすごい勢いで部屋に走っていく美水（怪我は？

「・・・アイツを素直にできれば、オレの勝ちか」

*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*ノ*

「ハアツハアツ・・・ 勢いで走って来ちまったけど・・・」

部屋の中でしゃがみ込む美水

「アイツ・・・ さっき もしかして・・・」

右手を右頬に当てる

「あれ・・・キス・・・？」

あの

あのリクオが？

アイツが？

「マジ・・・かよ・・・」

アイツなんか・・・

「大嫌いだったはずなのに・・・」

昼のリクオは嫌いじゃなかった

いつからか

アイツに会うようになって

アイツに会うといつも心臓が痛くて

だから会いたくないと思った

でも

アイツに会えなかったり

アイツが怪我をすると死にそうなくらいに苦しくて

「結局ウチも・・・アイツの事・・・」

好きだったんだ・・・

嗚呼神様

この気持ちが恋だなんて

絶対に言わないでください

第八夜：うた 歌 唄 （後書き）

ハハハ・・・

自分の文才のなさにビツクリだよ

なんか曲名が穴だらけですいません！

検索すればすぐ出て来ると思います

全て私のお気に入り曲です

それでは！

第九夜：苦しい 愛しい

主様

私を創ってくれた人

私の姿は貴女と似ている

でも全ての色が対になっている

嗚呼

主様

私は一生

貴女に近づく事はできません

アンタは確かに

ウチなんだよ

ウチであってウチじゃない

そんな存在だけれども

アンタという存在なんだよ

「.....」

不貞腐れた顔でさつきから何も言わずに
ただただ月を眺めている

「.....苦しい」

こんなにも苦しいなんて

「知っていた方が」

わからなかった頃よりも

「・・・ずっと苦しい」

恋愛に対しては何の興味も示さなかった自分が

もしかしたら

誰よりも

ずっと昔に

恋に落ちていたなんて

「・・・信じらんない」

もやもやして仕方がない

「・・・」

こんな気分紛らわす為にも

「明日って言ったけど」

今でも良いよね

美水の部屋には一つ

大きな鏡がある

その鏡は

持ち主の拒絶する者の侵入を許さない

美水は壁に立てかけてあつた血紅に手をかける

そして刀を抜いた

鏡に正座になって向かう美水

刀が

美水の髪を

音もなく切った

魍之一族にとつて

髪を切る事は

一生

誰か一人の為に生きていく事を
覚悟する事と同じだという

「……式神よ」

切り取った髪を持ち

静かに月に照らす

「私の髪を授けよう」

言霊を乗せ、妖力を流す

「お前の名前は弥穂」

「私の片割となる存在」

「……主様」

そこに立っていたのは

美水と同じ容姿をした

しかし格好や色は異なる

美水の式神だった

灰色の髪に

橙の瞳

立派な着物を着てはいるが

その下に着ているのは

美水が戦い血に染めて来た

古い着物だった

「私の命は」

「主様の為に」

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

美水は庭にある池に向かっていた

「あ、いたいた」

池にいたのは河童ではなかった

「淳」

淳きよと呼ばれた人影が美水の方を振り返る

「美水様！ 何か様ですか？」

嬉しそうに笑顔を浮かべながら訪ねてくる

淳

それは魍之組幹部であり、

連絡係でもある

人魚の名前だ

「あのさ、魄龍にウチが式神創ったって伝えて」

「あ、はいはい わかりました」

そして池にくぐる寸前に淳はこう言った

「大丈夫！行ける！」

「何がっ！！？」

「でもスイ、一応髪揃えさせて？」

「え？ あ、うん」

光実の言う事を素直に聞いてしまった美水
聞かなきゃ良かったと後悔する

「今日何かあんの？」

鈴に聞く美水

「え、別に？（汗）」

「……」

「はい！ 終わったよ！スイ」

「あ、ありがとうみーちゃん」

「じゃ、カエ」

「後はよろしく」

「うん」

「？」

「スイ」

「ん？」

「今日、総会だよ」

「……………」

「総会……………っ！！！！！！……？」

仏頂面で座っている美水

場の雰囲気が一気に悪くなる

「ったく、なんで総会なんか・・・」

「おぬしの総会嫌いはなおつとらんのかい」

「そーだよぬら爺」

ぬらりひよんに聞かれてこたえる美水

「だって一ツ目いるもん」

「なっ！ それじゃあワシが悪いみたいじゃねえか！」

「アンタが悪いんだよ、実際」

「美水、お前はコレでも飲んで黙って座ってる」

そう言つてリクオが美水に向かって投げたのは妖銘酒だった

「・・・わーったよ」

妖銘酒が好物の美水は承諾した

だが周りから見れば

（（（（（美水様がリクオ様の言う事を聞いている！？）））））

こんな事しか考えられなかった

「明日は雪でも降るのでは・・・」

「いやいや、天変地異が起きるかもしれないぞ」

「大妖怪共が押し寄せてくるんじゃないか？」

ヒソヒソと話す妖怪達

だがそんなのは、耳と鼻がいい美水には丸聞えで

沸々とわき上がる怒りを押さえながらも

怒りでの震えは止まらない

「なにが天変地異だ畜生！ーーーー！！！！！！！！！！」

総会が終わり妖怪達が帰った後、一気に怒りを叫ぶ美水

「ウチがアイツの言う事素直に聞いているって！？んな訳あるかコノ

野郎！！！！

酒欲しかつたんだからいいじゃねえかよ！それなのにあいつらは雪降るだの天変地異だの

大妖怪共が押し寄せせるだの・・・ テメエ等の頭はオカラかってんだ！！！！」

「美水、とりあえず落ち着け」

無駄だとはわかっていても、一応宥めてみるリクオ

「落ち着ける訳ねえだろうがっ！！！！！！」

瞳が鬼化している美水（ヤバイ

ため息をつくリクオ

1番触れられたくない話はなるべくしたくはなかったのだが・・・

「お前、なんで髪切った？」

「っ！！」

「それにその格好、どおした」

「これは・・・みーちゃんたちが無理矢理・・・

髪は・・・」

「魍之一族では」

「・・・」

「髪を切る事は、一生誰かについていく事を覚悟するようなもんだる？」

「！」

「お前は誰についていくんだ？」

「・・・ウチは・・・」

「・・・お前・・・だよ・・・」

「・・・ホウ」

「言ったからな！ もう帰る！」

「・・・ありがとうな」

最後に呟いたリクオの声が聞こえたか聞こえていないのか
美水は顔を赤くして部屋を出て行った

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

主様？

どうなされたのですか

そのように顔を赤くして

「・・・主様？」

「弥穂・・・ ウチ今死にたい気分・・・」

「だめですよ」

「わかってるんだけど・・・」

「・・・リクオ様ですか？」

「何でアイツ！ 自分がわかってる事をわざわざウチに言わせんだ
よー！！」

「・・・リクオ様、美水様の羞恥心を煽りたいのでは・・・」

「は？」

「ですから、リクオ様は根からのSでしょう？ でしたら・・・」

「アイツただの変態じゃねえか！！」

「変態というか・・・」

「あー！ もういい！ 聞きたくない！！！」

「・・・美水様」

「・・・ん？」

「そろそろ、寝る支度をいたしましょうか」

「・・・そうだね・・・」

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「はい、奴良組には今次期総大将と鬼姫が居ます」

「あらそう 報告ありがとう」

冷たい風が吹く中

そこに立っていた一人の少女

見かけは美水と同じくらいだが

容姿は全く違う

髪はウェーブがかかっていて

色は薄黄色

瞳の色は赤

口には紅を塗っていて

赤みが掛かっている

「あんな娘と次期総大将が婚約者っていうのが許せないのよねー」

「絶対に」

「私が手に入れてやるんだから」

言葉が

虚しく響いた

第九夜：苦しい 愛しい（後書き）

・・・何かもう

力つきました

所詮私の文才は

ミジンコほどしかありません・・・

そんな私の小説をここまで読んでくださった

貴方に感謝です！！！！

第十夜：我しか愛せぬ女 憐驪

貴方の事を

いくら愛しても

愛しても

愛しても

愛しても

アイシテモ

アイシテモ

アイシテモ

イクラアイシテモ

アナタノコトヲ

アイシキレナイ

この気持ちを

俗に「愛」と呼ぶ

可笑しな話

後少しで

お前はオレを見る

待てるか？

否

待てる訳がない

昔魄龍に聞いた事がある

ウチは獣鬼だと

他の鬼とは違い

考えを持たない殺戮鬼だと

なんでそんなものに生まれたんだろうか

そんなウチが

リクオ

アンタの隣に居ていいの？

「わかんない・・・」

獣鬼が次期総大将の隣に？

笑わせる

自分の事なのに

他人事のように笑いが出て来る

「ハハハ・・・」

自嘲を含む笑い声

右手首を両目に当てる

何も見たくない

こんな自分

誰にも見られたくない

//*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*/*

「スイ！ 今日学校休みだよ！ やったね！」

「なんでウチらの学校こんなに休み多いの」

喜ぶ鈴を尻目に暗い声で言う美水

「スイ！？ なんか近寄るなオーラ出てるよ!？」

華慧菜に言われると納得する自分がイヤだ

そう思いながらも答える

「知らない」

「スイ、右目見える？」

光実に聞かれたが

見える訳がない

「全然 真っ暗」

美水は左目を固く閉じて光を全く映さない右目をその場にいる全員に見えるようにして

笑ってみせた

「皆の顔 全然見えないよ 場所もわかんない

ねえ、皆どこ？」

「す、スイ……？」

「どうしたの……？」

いつもの美水と違和感を感じる美水

そんな美水に皆が皆戸惑っていた

「別に なんにも ウチ行くわ 場の雰囲気めんどくさい」

片手をヒラヒラさせながら部屋を出て行く美水

「……」

「スイどうしたんだろ……」

「何か様子変だったね……」

光実と華慧菜が話してた時

「わかつちゃった」

鈴がいきなりわかりました宣言

「「へ？」」

「スイさ、本格的に悩んでるよ 恋に」

「え、恋って!？」

「あれ、カエ気付いてない？」

「カエ……」

「2人共、そんな惨めなものを見る目で華慧菜を見ないでよ!」

「カエ、いい？」

「？ 何この妖気………侵入者？」

……家に入ってきて来る……

「……まあ、何かあつたら他の奴らが行くか」
今の自分は外に出れるような心情じゃない

「……」

思い出すは昔の事

鬼の力を知らなかった自分

嗚呼…… そうか

あの時自分は暴走したんだっけ

いつぱい傷ついて、でも止まらなくて

止まった時には手遅れだと叫ぶ声が聞こえた

皆が自分のすぐ側で泣いていた

顔にもたくさん涙が落ちて来た

自分の頬を伝った

あの涙は誰のだったんだろうか

「……なんで」

なんで助かってしまったんだろう

生きる意味がないのに

こんな自分

生きる意味がないのに

……でも

「アイツが必要としてくれているのなら……」
まだ自分のいる価値があるのなら……

「生きたい・・・」

アイツの側に居たい

「

」

呟く声は

遠のく意識の中にある

自分でも何を言ったのかわからず

「美水」

その時部屋に入って来たリクオにしか

その呟きは聞こえなかった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「あれ？ 牛頭丸、あの人誰だろ」

「ああ？・・・見かけねえ顔だな」

奴良組に入って来た人物を見つけると、2人は不思議そうに話しかけた

「ねえ、君誰？」

「今日からここで働くことになった憐驪くんり」と申します」

「憐驪？」

「フーか、そんな話聞いてねえけど・・・」

「総大将様はご存知のはずです」

憐驪は赤い瞳を牛頭丸と馬頭丸に向けると

張り付くような笑みを浮かべて去っていった

「・・・コワッ（汗）」

「牛頭、あの人なんかイヤな感じがする・・・」

「……そうだな」

憐驪が去っていった方向を

牛頭丸は感情のない目で見つめていた

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「お主か？」

「はい 今日から暫くお世話になります」

「そうか」

「あの、総大将様……」

「なんじゃ？」

「若頭殿に会わせてはいただけませんか？」

「別にかまわんぞ」

「ありがとうございます」

「……お、今は……」

「どうかなされましたか？」

「この廊下を右に曲がって5番目の部屋に居る 自分で会いに行

つてはどうじゃ？」

「そうさせていただきます」

憐驪は軽く頭を下げると部屋を出て行った

「……ん……」

美水は目を開けた

見慣れた天井が映る

「気が付いたか」

声が出た方を振り向くと、そこに居たのはリクオだった

「お前、俺がこの部屋に入って来たと勝手に倒れたんだ」

「……た……おれ、た……？」

「？ 大丈夫か 上手く話せてねえよ」

「あ、・・・う、ん」

「落ち着け(汗)」

「・・・！！！！　なんでお前がここにいんだよ！！！！」

「お、元に戻った」

「質問に答える！」

「お前を探してたんだよ」

「は？」

「鈴達に聞いた　お前の様子が変だつて」

「(あいつら・・・！！)　・・・」

「なにがあつた？」

「・・・別に」

「・・・ほう？」

「っ！！！！」

あり得ないほど綺麗な笑みを浮かべたリクオ

その笑顔は夜の顔には似合わないほどで

美水は悪寒を覚えた

「言えよ」

笑みを浮かべたまま追いつめて来る

冷や汗をかきながら後ずさっている

「・・・あ」

壁に背がついた

一瞬の油断をリクオは見逃さず

両手を拘束した

「言えつて」

「っ(痛っ！)」

両手を押さえる力を強める

一向にやめる気配がない

「意地はつてねえで、言っちまえよ(黒笑)」

「うう・・・(汗)」

目をそらす、それを許さないと云わんばかりにリクオの手が頬に

添えられる

「言え」

有無を言わさない声で言われると、逆らえなくなる

「・・・考えてた」

「？」

「アンタの側にウチが居ていいのかって」

「・・・」

「こんなに汚い奴がアンタの側に居ていいのかって・・・っ!」

「汚くねえよ・・・」

「ふえ・・・？」

らしくない声を出す美水

慌てて拘束が緩んだ手で口を押さえるとリクオは苦笑した

「お前はずっと俺の側に居ていいんだ」

「・・・」

「俺の隣に居続ける」

「っ」

だから女ってヤダ

すぐ涙腺が緩む・・・

涙が出ないように我慢しながら
最後に一言言ってみせた

「・・・後悔すんなよ・・・？」

笑ってみせた

泣きそうになっているだろう顔で

リクオも微笑み返す

「上等だ」

珍しく素直にしている美水を見て

まるで触ったら壊れてしまいそうな自分の婚約者を

リクオは優しく抱きしめた

「お前こそ、途中で逃げんなよ？」

「ったりまえだ・・・」

鬼はまだ知らない

この幸福が壊れそうになる事を

第十夜：我しか愛せぬ女 憐驪（後書き）

なんか

くそあめえ

なんだこれ

この小説読んでくれた人は私にとってネ申です・・・！！
ほんっつとつにありがとございました！！！！

第十一夜：関わるな（前書き）

美水ちゃんが病んでます

第十一夜：関わるな

貴女みたいなのが

次期総大将の許嫁なんて許さない

許さない

許さない

ユルサナイ

ユルサナイ

さあ

貴女はどんな死に方がしたいのかしら？

「……」

「……」

「そろそろ離れてくれない？」

「お前が泣いてるからだろうが」

「……泣いてねえよ」

「泣いてる」

「じゃ、せめて昼に戻って」

「……チツ」

「おま、舌打って……」

全部言わないうちに

リクオが昼に戻った

「え、僕何して…… わっ！？ 美水、ごめん!!」

「……自分でやつといて何を……」

「いや、僕夜の方になるとなんて言うか……その……」

「わかったわかった 言いたい事はよくわかる」

「本当、ごめん……」

「・・・いいよ」

その時

障子が開いた

「失礼いたします」

「・・・誰？」

「今日からこの屋敷でお世話になります 憐驪と申します」

「憐驪・・・？（どこかで聞いた事が・・・）」

「貴男がリクオ様ですか？」

「あ、うん」

「お会いできて嬉しいです！！ よろしくお願ひしますリクオ様！
！」

につこりと笑ってリクオの手を握る憐驪

その手にはかなりの力が込められていた

「（リクオの手が折れる・・・）大丈夫？ リクオ」

「うん・・・ なんとか」

「貴女は？」

「（こつちの台詞だ馬鹿野郎名前だけ聞いたんじゃねえよ）美水」

「美水？ では貴女が鬼姫ですか？」

「・・・一応」

「失礼いたしました 今日からよろしくお願ひします」

正座して頭を下げる憐驪

肩からは金髪 of 髪が流れ落ちる

薄く開いている目は赤い

「（こつちの一般世間では美人って言うのか・・・？）
よろしく」

言った途端

憐驪の口端がつり上がり、

瞳がこちらを向き

気味の悪い笑顔を見せて来た
「っ！」

だがその笑顔がすぐに消え、
憐驪が顔を上げる

「どうかなさいましたか？ 美水様」

「・・・別に」

美水が感づいたのは

コイツが敵だ

という事だけだった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

美水は部屋を出て庭を散歩していた
すると、

ふと懐かしい気配

「美水様！」

「・・・魄龍？」

目の前に居たのは

紛れもなく自分の側近であり、

今魍之組の若頭である

魄龍だった

「魄龍！？ どうしてここに！」

「貴女の様子を見に来たんですよ 美水様

立派になられましたね・・・」

「っっ！」

美水は魄龍に抱きついた

目の前に自分が大好きな人物が居る

ただそれだけが嬉しかった

「久しぶり・・・ 魄龍・・・」

笑顔で言う美水

その笑顔に魄龍も嬉しそうに目を細める

「お久しぶりです 美水様」

「あ、ウチの式神見る？」

「はい 是非」

「こつち！」

まるで幼子の様に

嬉しそうに歩く美水に

魄龍は

一生ついて行くと

心の中で決めていた思いを

再度確認した

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「主様？」

「弥穂、ウチの側近の魄龍だよ」

「美水様、これが・・・」

「ウチの式神」

目の前に居る少女そっくりの式神

その式神は魄龍を振り向くと

柔らかいが笑顔を見せた

「私は弥穂と申します 魄龍様」

「よろしく 弥穂」

バタバタバタバタバタ

廊下を走る音

「？」

美水が疑問に思っただけを聞くと
息を切らしたリクオが立っていた

「美水！ 匿って！！」

「え、」

言い終わらないうちにリクオが部屋の中に入り
襖の中に入る

そして、

「リクオ様——！！！」

隣驪が来た

「魄龍、弥穂、隠れて！！」

「「え？」」

「早く！！」

2人が急いで隠れると、

隣驪が入って来た

「あ、美水様・・・ここにリクオ様は「何か用？」・・・え？」

「あのね、ここウチの部屋なんだけどさ、そこは良いとする

アンタ、リクオに何のような訳」

「あ、その話をしていたらいきなりお逃げに・・・」

「逃げるような事したんでしょ？ あんまり困らせないで」

「・・・っ！」

「あと」

「な、何ですか・・・」

「鬼姫に喧嘩売った事、後悔すんなよ」

「！！！」

隣驪は美水をキツと睨むと

部屋を出た

「・・・で、何された？ リクオ」

「いや、いきなり迫られて・・・」

ため息をつく美水

「だと思った・・・魄龍、弥穂 もう出て来ていいよ」

「「はい・・・」」

2人はそれぞれ天井裏、床から出て来た

「よくそんなところに居られたね・・・」
「まあ・・・」

「これでも隠れるのは得意ですから・・・」
「ウチとよくかくれんぼしてたもんね」

「え、美水も!？」

「も? つてことは・・・リクオも?」

「うん、よく氷麗とやってたんだ」

「へ」

でも、と

美水は呟いた

「とにかく憐驪 アイツには気い付けなよ」

「え?」

「夜のアンタは大丈夫でも、昼のリクオは危ないの
リクオ女に迫られる事ないでしょ?」

「美水がしないからね」

「・・・アンタ最近夜と性格似て来た?」

「なにが?(黒笑)」

「(ヤバイ! コレはヤバイ!)・・・まあ、まだましか・・・」

「・・・美水様」

「何? 魄籠」

「さっきの者は「みーすーいーさーまー!?!?!」・・・?」

「氷麗!？」

「さ、さき、さっき、お、おんなが」

「落ち着いて!」

「何があつたの?」

「さっき憐驪という者が・・・あの・・・」

「・・・いいよ」

「え?」

「ウチに言いにくい事でも良いよ

氷麗が困る方が嫌だ」

「み、美水様・・・っ!!」

涙で潤んだ瞳を向けて来る

「実は・・・」

廊下で氷麗が歩いている時、

憐驪が通りすがりにこう言ってきた

「あんたも鬼姫が邪魔なんでしょ？」

「・・・え？」

振り向くと憐驪は張り付いた笑みを浮かべていた

「だってあんな汚い女、リクオ様に相応しいと思う？」

それにアンタも好きなんじゃないの？リクオ様

だったら消しましょう 獣鬼は殺戮鬼なんだから

「何を——」

「あんな女 大っ嫌い」

「と、言う訳なんです・・・」

私、美水様の事大好きなのに！

あんなこと・・・っ!!」

「・・・ありがとう 氷麗」

「・・・美水・・・」

「皆、今日からウチに関わらないで」

「「「「えっ!?!」」」」

「ウチの事嫌いになったフリして

なんなら嫌いになっても良い

絶対近づかないで」

「なんで？美水！」

「ウチに関わらない方が、身の為だよ」

「でも・・・」

「関わらないで!!!!」

「!?!?!」

「ウチに関わんな
少しでも近づいてみる……？
ウチは……」

「ウチはアンタらを許さない」

「……っ」

「そんな……美水様っ……」

「……美水様……」

「私は！ 貴女の式神なのに……」

「そんな……っ」

「関わるな 迷惑だ」

「出て行け」

「！」

「命令だ 弥穂」

「お前は魍之組へ行け」

「……ハイ……」

全員が部屋から出て行ってから

美水は頂垂れた

「……っ」

何がなんだかわからない

頭が痛い

「……」

アイツが世話役になるんだったら気を付けた方が良い
毒を盛られるかも

「……きついな……」

食事はできない

幸いもう夏休みだ

「……っ!!!」

皆が泣きそうになりながら居るのを、

美水は背中越しに堪えていた

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「美水様、ご飯です」

「……」

憐驪に渡されるが食べない

毒の匂いがする

「どうしたんですか？ お食べください」

これは鬼にしかわからない

わかってたらぬら爺我止めてるはずだから

「今日食欲ないから」

ポツリと言うと氷麗が心配そうに見て来る

「……」

睨みつけると申し訳なさそうに顔を下げ

「ごちそうさま」

唯一氷麗が作ったおかずだけ食べると、美水は部屋を出た

「……ダメだ…… やっぱり腹減る……」

腹部と口を押さえて廊下にしゃがみ込む

「……後一週間……、か」

後一週間すれば……

「アイツを……」

アイツを……

この屋敷から……

「追い出せる」

それまでこの体が保つかどうかなんて

誰にもわからない

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・美水様」

美水が居なくなつた席を氷麗は見つめた

「・・・私が・・・」

自分が身代わりになれたら・・・

美水様は・・・

「無力な私を許して下さい・・・っ！」

その様子に青多坊も気付く

「おい、雪女 どうした」

「あ、青・・・ いいえ！ なんでもないわ！」

きつと美水様はこの事を話すのを望んでいない

私がすっかり外からお護りしないと！

「青、片付けを手伝ってちょうだい」

「おう」

「・・・あの女あ・・・ 気付いてた・・・」

この私が入れた毒に

「よっぽど殺されそうになったのね」
人間と獣鬼の娘ですもの
当たり前だわ

「ここは毒殺じゃなくて」

過労死の方が良いかしら？

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・もう5日か・・・」
憐驪が来てから5日

「いい加減なんか食べないと死にそう・・・」
でも油断できない
たいていの食べ物から毒の匂いがする

獣鬼にしか効かない 凜西華りんせいがの匂いが

「ご丁寧なこと・・・」

もう夜になった
リクオは大丈夫だろうか
・・・きつと大丈夫

その時

「!!」

美水を吐き気が襲った

「うゝえっ・・・ゴホッ」

胃の中に何も無い所為か、胃液しか出てこない

「・・・死ぬかも　ウチ」

「誰が死ぬって？」

「!？」

障子の方を振り向くと

「・・・何で・・・」

リクオがいた

「アンタ、何でここに・・・!」

「出かけるぞ　着いて来い」

「はっ？」

「つつつても、歩けねえか　その状態じゃ」

生気がほとんど感じられない

歩く体力もないはずだ

「仕方ねえな・・・」

「おわっ!？」

リクオに抱え上げられる美水

「捕まってる　落ちたくなきゃな」

「あ、アンタ　どこ行く気・・・」

「着けばわかる」

リクオはそれだけ言うと

夜空へと跳び出した

「あんだけ関わんなったのに・・・」

「俺は言われてない」

「でもっ・・・!」

「不安そうな顔すんなよ」

「・・・け」

「・・・何だ」

「少しだけ、肩かせ・・・っ」

「・・・ああ」

リクオの方に顔を埋めると

美水は声を押し殺して

静かに

静かに

只々泣いた

「着いたぜ」

「ここ・・・」

着いた場所は良太猫達が運営する

『化猫屋』だった

「ここなら安心だろ」

美水を抱えたまま入るリクオ

「ちよ、下ろせって!」

「・・・お前立てんのかよ?」

「・・・さあ」

「じゃ、試してみな」

そう言つてリクオは美水を下ろしたが

美水は立ち上がる事さえ出来なかった

大分衰弱しているようだ

「・・・」

「ほらな?」

もう一度美水を抱え直すリクオ

「若!」

リクオを呼んだのは良太猫だった

「また来てくれたんですかい！」

「お、御嬢も！」

抱えられている美水を見て、良太猫が言う

「お熱いですね〜2人共」

「ち、ちがつ！」

「だろ？ そこいいか？」

「ハイ！ 勿論っすよ！」

「勝手に話し進めんな！」

美水に構わず席に座るリクオ

「・・・座るくらいは出来るか？」

「それくらいなら・・・」

大人しく座ると、良太猫が注文を聞いて来た

「御嬢 何にしやすか？」

「・・・」

「・・・美水、どうするんだ」

「・・・ラーメン」

「了解っす！ 若は？」

「俺はいらねえよ」

「そんじゃ、すぐ持って来やすね！」

大盛りで！」

美水の肩がピクツと動く

「お前の大食いは妖怪の全員が知ってんだよ」

「〜っ／＼／」

顔を真っ赤にする

「今はそれの方が助かんだろ？」

「・・・まあ、ね」

「・・・お前、いつからだろうな」

「？」

「誰にも迷惑をかけようとしなくなった」

「・・・ああ」

「あの時か」

「？」

「あの、暴走した時からか」

「!!!」

「俺だつて覚えてるぜ？ あの時の事」

「・・・ウチが未熟だったからだよ」

美水は頂垂れた

「離すなと言われていた護符を、不注意とはいえ離してしまった

ウチが馬鹿だったんだ」

「んなに思い詰める事は・・・」

「！ 後少して、屋敷の奴ら皆殺しにしちまいそうだったのに、思い詰めずに居られるか！」

「・・・！」

「アンタも！ 殺しちまいそうになったんだよ！ それを気にせずのうのうと生きてけつてか！？」

出来る訳ねえだろ!!!」

「落ち着け！」

「!!!」

鬼化していた目が元に戻る

「ラーメンお待たせしました！」

良太猫がタイミングよくラーメンを運んで来る

「チャーシューから麺から何まで、普通の3倍っすから！

おかわりあつたら呼んで下さい!!!」

「・・・うん」

「どうすか？ お味」

「・・・おいしい」

「すっごくおいしいよ 良太猫」

泣くのを堪えながら笑顔を向けた

「！ 有り難うございやす！」

嬉しそうに返す良太猫

周りの気遣いが

美水は嬉しかった

第十一夜：関わるな（後書き）

こんな女の嫉妬のドロドロした話書くのなれてません
正直疲れました

次話もなるべく早く書きます

第十二夜：蘇陰と璃陽

高い

低い

紅い

蒼い

短い

長い

わつちと

小生は

正反対

だが同所もある

2人で

護る者

それは

美水様なり

「おーし、次はどいつじゃあ!!!」

ラーメンを食べてすっかり元気を取り戻した美水は

妖銘酒を頼みそれを1瓶一気飲み

それが引き金となったのか

化猫屋に來ている酒乱の妖怪達が

全員で大飲み対決を始めた

そして

今に至る

「もういねえのかあ!?!」

前まで自分がどのような状況だったかも忘れ

服が開けているのを気にせず、酒瓶を振り回す

「じゃあ、俺と勝負してみねえかい？」

「！・・・いいよ テメエ、負けたら女に負けたって言いふらしてやるよ」

美水の機嫌は絶好調

リクオの誘いも難なく受け入れる

（結構立ったよ！¥（。。（。）（））

「おま、そろそろ諦めるよ・・・」

「そつちこそ・・・」

とうとう2人が飲んだ量は合計せずに5樽を超した
お互い負けるのがそれほど嫌なのか、譲らない
美水なんかペナルティも無い

「・・・つ まだまだ余裕って表情してんじゃねえよ・・・」

「お前はそろそろ限界かい？」

「・・・ウツサ、いつ」

流石の美水も5樽も飲めばきついはず
だがリクオはまだまだ余裕らしい

「お前、なんも罰ねえんだから、そろそろ止めとけ」

「・・・まだだつ 飲み足りねえっ」

その時

『美水様』

「・・・？ 誰か今、ウチの事呼んだか」

「わっち等だ 美水様」

声のした方を振り向く

そこに居たのは

「・・・子供か？」

女と男の2人組だった

女の方が身長は高く、履いている下駄が低い

そして髪は短く紅かった

男の方が身長は低く、履いている下駄が高い

そして髪は長く蒼かった

お互いの身長差を下駄で埋めている為、

横に並べば高さが揃っていた

だが2人にはそこまでの身長差が無い

あるとしても、せいぜい4cm程で、見た目は7歳程だった

女は前髪を真っすぐに揃え、後ろ髪は肩辺りで真っすぐに揃えている

男は前髪を揃えずにバラし、後ろ髪は頭の上で勾玉を使い高く結ん

でいる

2人が来ている服は術者の衣装で、縫ってある糸が紅いか蒼いかの

違いだけだった

「・・・蘇陰そいん、璃陽りやう・・・？」

美水は紅い方を蘇陰、蒼い方を璃陽と呼んだ

『はい』

「なんで！ここに・・・」

「美水様、」

「酒はあまり飲まない方が宜しい」

「な」

「貴女とて限界のはず」

「ならば止めるのが道理」

「・・・」

『美水様』

「わかたよ！ 止める！ 何でお前らがここに居るのかを聞いてい
る！」

「わつち等は」
「貴女を護る為に居る」
「・・・まあ、そんな事だろうと思ったけど・・・」
ため息を吐いて呆れる
「美水、誰だ？」
「ウチの組の術者 得意なのは蘇陰が蘇生術 璃陽が呪術」
「これで術者か・・・ 奴良組にはいなかったか 術者」
「見た事ない」
首を傾げる仕草をする美水
タイミングを計って蘇陰と璃陽が話しかけて来た
「・・・わつちは蘇陰と共に美水様に忠誠を誓った者じゃ」
「お主が奴良リクオか？ 名乗らない所からすれば、上の者じゃろ
う」
「わつちは構わんぞ 名乗る者は信用できん」
「小生もそうじゃ 名前を聞かずに名乗る輩は何かある」
「そうか・・・」
『それに』
「？」
「主は美水様の婚約者だろう？」
「小生達を気遣うのはおかしかろう」
「お、お前ら!!」
「・・・おもしれえ奴等だな 気に入った」
『面白い？』
「わつち等をそう言ったのは主が2人目だ」
「小生達を面白いと思う者は他にも居たのか」
「1人目は？」
「美水様だ(じゃ)」
「・・・」
「同じ事考えてたんだな」
「・・・そーだな・・・」

「・・・とりあえず、お前らどうすんだ」
『奴良組へ行く』

「・・・は？」

「魄龍殿だ」

「彼奴が行けと言いおつたのじゃ」

「・・・魄龍・・・」

「いいぜ」

「!？」

『そうか』

驚く美水を無視してリクオは続けた

「お前らが美水を護ってくれるんだろ？」

『勿論』

「美水、お前にとつても都合は良いだろう？」

「ま、まあ・・・」

「じゃあ、そうしろ」

それだけ言つと、身を翻す

その後を、美水と蘇陰、璃陽は追つて行つた

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・誰？」

憐驪が言つた

「・・・誰だろうな」

名乗る気がないのか

リクオはそのまま歩き出そうとした

「・・・リクオ様？」

言われた途端

リクオが止まつた

「・・・ああ」

「やはりリクオ様!! その姿は・・・」

「テメ、さつさと歩き出してんじゃねえよ!!」

一気に走つてきたのは美水と蘇陰、璃陽だった

「・・・美水様・・・どちらへ？」

「！・・・憐驪」

「2人でどこへ行っていたのですか　そしてその餓鬼共は
ほう、わっち等を餓鬼と言うか」

「主の方が餓鬼じゃ　小生達が何年生きていると思っておる？」

「千だ　主の倍は生きています」

「！！　だが、見かけは餓鬼だ！」

「見かけで決めつける者は阿呆だ」

「そのような奴が我を失うのじゃ」

「煩い！　誰だお前等は！！」

「まったく・・・　年上を敬わんか」

「小生達は魍之組の者じゃ　今日から世話になる」

「なっ・・・！」

「そう言う事だ　下がって　邪魔」

美水が追い討ちをかけるように睨みつける

「・・・今までどこへ・・・」

「飯食いに行つてたんだよ　わりいか」

そつぽを向き美水はリクオの後を追つた

「テメエ！　先に行つてんじゃねえよ馬鹿野郎！」

「こんな遅くに騒いでんじゃねえよ猫野郎」

「何時のネタだよ！　もう覚えてる奴いねえよ！！！」

口喧嘩をしている美水の顔は心無しか嬉しそうだった

その顔を見て憐驪は顔を歪めた

「・・・！」

『主が美水様を出し抜くのは無理な話』

「は」

『後悔するが良い』

璃陽と蘇陰はそう言つて美水達の後を追つた

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・なにコレ」

いつの間にか大宴会になっていた

「お、美水様！」

美水が関わるなど言っていない妖怪が話しかけて来た

「舞って下さい!!」

「・・・はあ？」

「美水様は舞が得意と、鈴様が」

「・・・鈴ちゃんが？」

鈴の方を見ると、顔を赤くしている鈴がいた

「え、酔ってる・・・？」

鈴が酒を飲む事はありません
とすると、匂いで酔ったのか

「・・・酒に弱いのか」

リクオが呟く

「弱過ぎだろ・・・」

「美水様！ 舞を！」

「え、でも道具も何も・・・」

「わっち等が用意しよう」

「蘇陰!？」

「小生達は術者じゃ それくらい序の口」

「おお、わかつてんじゃねえかちっこいの!!」

『主よりも長生きよ』

「え!？」

「でも、衣装も・・・」

「それならおまかせを！」

そう言っただけ来たのは毛倡妓だった

「美水様、こちらへ!!」

「はえ!？ え、ちよつと!!」

腕を引っ張られて引きずられる美水

「……………」

「……………」

「……アイツ、舞えるのか？」

「美水様の舞は美しい」

「まさに名前の通りじゃ」

「名前……？」

「水が流れる儂げな瞬間の美」

「美水様の名前はそのような意味を持つ」

「……アイツにピッタリだな……」

美水が引きずられて行った方向を

微笑んで見つめるリクオだった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「……………毛倡妓？」

「はい、なんでしょうか？」

「なにこの格好」

「お似合いですよ〜美水様あ〜」

「そう言う意味じゃない！！」

美水は舞用の着物を着ていた

色は紅 袖と裾には薄い蒼の花が描かれている

帯はいつも美水が使っている物で（出入りの時とか）黄色かった

髪は整えられていて、櫛を刺している

顔に目立った化粧はされていないものの、唇には紅が引かれていた

「……この配色……」

「あの子達ですよ！ 丁度いいのがあったので」

似合うでしょ？と微笑む毛倡妓

「この扇を使つて下さいね」

渡された扇は黒を地に川と鶴の模様が描かれていた

「……こうなったら舞つてやるうじゃないか」

決心した美水は大広間へと向かった

「似合っているぞ 美水様」

「天女のようにじゃ」

「いや、そんな事ないから」

褒めて来る蘇陰と璃陽の言葉を否定する

「様になってんじゃねえかい 似合ってるぜ」

「!!!・・・世辞で喜ばねえよ」

内心嬉しかった美水だが、照れ隠しかなにか、否定する

「お前、舞えるのか？」

「・・・・・・舞えるよ」

そういつて障子を開けた

そして

間

「騒いでるお前らに褒美だ馬鹿野郎！ ウチが舞ってやるよ!!!」

大声で言い放った美水に対して、

歓声上がる

「舞って下され美水様！」

「鬼姫の舞を見せて下さい!!!」

「いいぞ美水様!!!」

妖怪達は美水が舞えるかどうか何て知らなかった
だが酔っている妖怪達にとっては楽しみであった
美水は前の方へ出る

後から蘇陰と璃陽が薄紫の布で包まれた琴やら三味線やらを持って
ついて来た

「?なんだ彼奴等」

「演奏すんだろ? いいぞー!!」

それぞれの感想を述べる

一瞬

体を包み込む風があつた

妖怪達が静まり返り前を向くと、そこには膝立ちをして顔を下に向
けている美水の姿

リクオも後の方へと座る

すると、美水が顔を少しだけ上げ、静まり返つた大広間の中で一人
笑つた

目はリクオの姿を捉えている

そして、一言

「馬鹿にすんなよ?」

言つた途端、扇を広げて弧を描く

するりと立ち上がる姿は風のようにだった

琴の音が鳴り響く

足を一步前に出して舞い始めた

その姿に妖怪達、リクオまでもが魅入る

三味線の音が入つて来た

その途端、動きが止まつた

少し間が空き、美水は扇を閉じ、ゆっくり曲に合わせて手を前に真
つ直ぐ伸ばす

璃陽が動いた

琴に巻かれていた布を美水の前に投げ出す

美水は腕を動かしそれをキャッチする

その布は閉じられた扇に引つかかった
美水がまた動く
膝立ちになったかと思えば立ち、先ほどと同じ舞を始める
美水が動きたびに布がなびき、美水の周りに川が流れているようだった

舞が終わった

誰も声を上げようとしない

只目を見開いて、美水を見つめている

美水が顔を上げて妖艶に微笑んだ

「どお？」

一気に歓声上がる

「最高じゃったぞー！！」

「あのように見事な舞は初めて見ましたぞ美水様！！」

「是非もう一度舞っていただきたい！！」

「流石は鬼姫じゃー！！」

全員が思い思いの歓声を上げる中、リクオが立ち上がった
静まり返る

「流石俺の許嫁だ」

リクオもまた妖艶に微笑んで言った

「くっ／＼／＼！！ 余計な事言っな馬鹿野郎！！」

夜になって三度目の『馬鹿野郎』を言っ顔を赤くした美水は
走って大広間を出て行った

「・・・スイ・・・」

ふと、光実が呟く

「・・・スイと話したい」

「・・・華慧菜も」

華慧菜も話に加わる

「まだ頭痛い」・・・「スイ？」
「いや、ここは気付こうよ鈴ちゃん」
「さつき舞ってた人、スイだよ」
「・・・あゝ 本当だー」
「鈴ちゃん、ここで能力使わないで」
「時間を頭の中で巻き戻さないで」
「おい」
「？ リクオ？」
「お前等、いつまでアイツと口訊かないつもりだ？」
「だって、スイが・・・」
「いいんだよ」
「「！？」」
「もう、話してもいいんだ」
「・・・！」
「明日、話しかけてやんな」
「「ハイ！！」」
嬉しそうに微笑む3人
それを見てまたリクオも微笑む
「お前等はもう寝ろ」
「リクオは？」
「やることがある」
そう言うと、リクオは術者組の方へと向かう
「お前等に頼みがある」
「なんじゃ？」
「言ってみる わっち等にできる事なら何でもするぞ」
「・・・料理は出来るか？」
「・・・？ 出来るぞ」
「小生達は昔、美水様の世話係だったのじゃ」
「幼い頃の美水様は好き嫌いが激しくてな、よく作ってやった」
「明日から、アイツに飯作ってやってくれ」

『承知した』

そして、それぞれの部屋へ帰って行った

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・熱い」

心が

「痛い」

体が

「・・・冷たい」

瞳が

「なんでそんな目で見るの・・・？」

少女は目の前にいる女を見つめていた

女もまた、冷たい目で少女を見つめていた

「・・・お前、今日から私の組へ入れ」

「!？」

「お前の両親は死んだ この戦争で」

「!! なんて」

「守らなかつたと？ 守つたさ 力の限り」

女はふと、憂いを帯びた瞳になった

「死んじまつたんだ 私の組の大半も」

「・・・名前は・・・？」

「私？ 私の名前は・・・」

「魍之 露水」

「・・・鬼神の魍之組か・・・？」

「そうだ」

「……私も入ろう 貴女の組に……」
「……名前は」

「こき 蟲稀 れんり 憐驪……」

「……おいで、憐驪」

私は貴女に一生ついて行くと決めた

貴女は死んでしまった

死んでアイツを守ろうとした

なぜアイツなの？

なぜ私じゃないの？

あんなめちやくちな娘……

私は憎い

貴女の娘が

守れない

第十二夜：蘇陰と璃陽（後書き）

毛倡妓の漢字わかりました！
ご迷惑おかけしました・・・

第十三夜：満月の夜

満月が

ウチ等を見下ろして

ぞっとくらい綺麗に

笑った

教えてあげる

アンタが知らない真実を

「美水様」

「もう朝じゃ」

蘇陰と璃陽に呼ばれて
ゆっくり目を開けた

「・・・おはよう」

『おはよう』

ぴったり挨拶する2人

・・・懐かしい

「懐かしいね こんな朝」

「そうだな・・・」

「美水様、朝食じゃ」

「え？」

なんでアンタ等が作ってんの？

訊こうとしたけど、それよりもっと強い違和感

「・・・・・・嘘」

蘇陰と璃陽は見た目が7歳の筈

・・・なんでウチより年上に見えるの？

「・・・えええええええー！！！！？」

ちよつと待ったなんでアンタ等が15歳くらいの身長なんだ
つか璃陽、アンタ髪すげえ伸びてるんだけど！あ、蘇陰もか
いや違うそうじゃなくて、！！

「アンタ等なんででかいの！？」

あれ待ておかしいなウチが1番最初に訊こうとした事なんだっけ
なんで2人は何時も一緒なの？だっけ

違えよそれは2才歳の頃の疑問だウチの馬鹿

そくだよなんでアンタ等が飯作ってんの？って訊こうとしたんだっけ
紛らわしいよその身長ってか落ち着けウチ恥ずかしいから

「美水様、心の葛藤はすんだか？」

「心読むなよ」

「小生達はあの身長だと料理が出来ないから、

術を使っただけじゃ」

「便利な術だなオイ」

「じゃろ？」

「じゃあ第2の質問 なんでアンタ等が飯作ってんの？」

『三代目に頼まれた』

「（アイツ・・・！！）・・・、そ」

「ゆっくり食べて下され」

「わかったよ」

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「ごちそーさまっ」

術者組が作った料理を食べ終える

「アンタ等飯作る天才 今度から炊事係がいい」

『やらんぞ』

「だよー」

そう思った 言っただけ息を吐く

「炊事係は諂鬢てんびんと甜燐てんりんだしね」

諂鬢と甜燐

それは、廻之組の双子の兄妹

諂鬢は兄であり、廻之組の突撃隊長

甜燐は妹であり、廻之組の医療隊長

だがなぜか炊事係もしているという2人である

「たまには代わってあげたら？」

「わっち等は無駄な仕事はしない」

「そうですか」

なぜか敬語

「・・・美水様」

「？なに璃陽」

「憐驪の事じゃ」

「はあ？」

「彼奴、今日追い出すのが得策じゃ」

「・・・！」

「美水様、仕方ない 彼奴は何か企んでおる」

「知ってるよ」

『今宵は満月』

「!!!」

「わっち等の力が」

「そして美水様の力が」

「最も強くなる日だ」

「・・・!」

唇を噛み締めて、目をそらす美水

「臆すな 美水様」

「貴女は自分の力を知っている」

「大丈夫だ 暴走すればわっち等が止める」

『この身に変えても』

「!!!」

その時

「スーーーーーイ-----!!!!!!!!!」

「ひゃうっ!?!」

もの凄い声で驚いてしまい後悔する

この声は確実に聞こえているだろう 皆に

そしてリクオにも

「・・・何のつもり」

「何のつもりじゃないよ 美水」

「リクオ（夜）がね、もうスイと話して良いって言ってたから来た

の!?!」

「・・・リクオ?」

「僕じゃなくて俺が言ったんだよ!」

「・・・そーですか」
「どしたのスイ 機嫌悪いね」
「そー思ってるんだ？」
「え、ち、ちがつ！」
「・・・プツ」
「コッコッ!?」
「アハハハハッ！なにアンタ達！ すごい面白え！！」
「笑いが、ちよ、横っ腹痛い！ハハハハッ」
「大笑いし始めた美水」
「放心状態の4人をよ所に立ち上がる」
「はーあ、笑った ウチちよと行ってくるわ」
「何処に？」
「華慧菜が訪ねる」
「決まってるじゃん 馬鹿だねえ」
「な！！」
「・・・2人の所だよ」
「にっこりと笑って部屋を出て行く美水」
「・・・あんなに笑った美水様は久しぶりだ」
「何年ぶりじゃろうな」
「・・・えーと・・・誰？」
「わっちは蘇陰」
「小生は璃陽」
「2人で美水様に使えている」
「術者じゃ」
「ふーん・・・」
「主は魑胤の者じゃろ？」
「えっ！？ なんてわかるの？」
「わっち等は何でも知っている」
「・・・すごい！ じゃあ、この子は!?!」
「フエ!?!」

そう言つて鈴が指を指したのは華慧菜だつた

「魅籠白の者だろ」

「主は魍魎嗣の者じゃな」

「・・・主は奴良リクオか 覚醒してないと気弱そうだな」

「え・・・（気弱つて言われた・・・）」

「すごい！ すっごい！！ 何でも知ってるの!？」

『ああ』

「やった！」

「『?』」

「あのね、ここわかんないの！ 教えて？」

「・・・璃陽」

「わかつた 小生が教えよう」

「ありがとう！」

「・・・鈴ちゃん・・・」

「宿題は自分で・・・」

喜ぶ鈴を余所に

呆れる2人だつた

/

「牛頭！馬頭！」

「！！スイ！」

「・・・美水・・・」

「ごめん！！」

「へ??？」

「関わるななんて言っちゃってごめん！ これからもいっぱい話そ

う！！！！

「！ うん！ いっぱい話そう！！」

「美水」

「・・・?」

「少しは俺等を信用しろよ 俺等は別に迷惑だなんて思っちゃいねえ
何でもお前に協力してやる」

「！牛頭う・・・っ！」

「？スイ？」

「ありがとう！ 2人共！！！」

ガバツ！

「な、美水！？」

「スイー？」

美水は2人に抱きついた

馬頭丸は全然大丈夫なようだが、牛頭丸は驚いていた

「本当にありがとう・・・ 2人共・・・」

「・・・・・・・・・・」

牛頭丸が黙って美水の頭を撫でた

「・・・・・・・・・・??？」

美水は呆気にとられて牛頭丸を見上げる

「スイ、僕達一応スイよりずっと年上なんだから」

「少しは兄貴面させろよな」

「・・・・・・・・・・ あ、そだね

「じゃあ、今度から兄貴って呼んであげよつか？」

「「今のままで結構です」」

笑顔で言う美水に少し退く牛頭丸と馬頭丸

「ハハツ」

「す、スイ（汗）」

「お前な・・・・・・・・・・」

「ごめんごめん！ じゃ、今度からは遠慮なく相談させてもらおうよ
言いながら立ち上がる

部屋を出る時に一言

「兄貴」

「
　　〃〃つ／／　　アイツ・・・！！」

「スイ〜！！　馬鹿あー！！」

2人はそれぞれの反応を見せた

／／*／*／*／*／*／*／*／*／*／*／*／*／*／*

日が落ちた

「・・・始めるぞ　璃陽」

「ああ　蘇陰、行くぞ」

「・・・ああ」

2人は歩き始めた

庭に出る

出た途端、庭いっばいに水が広がる

その水は

たった一人庭に出ていた

隣驪に襲いかかった

今日で良い

今日で良いわ

アイツを殺す日は

今日は満月

アイツもあの人の力を押さえられる訳がない

露水様

やっと会えますよ

憐驪が笑った時、

水龍が襲いかかって来た

キイイイイイイイイイイイイイイイイ

「!!!」

憐驪が飛び上がった

すると、水龍も同じように上へと上がって来る

「チツ あの術者のか」

憐驪が舌打をすると、腰に付けていた袋の中から小瓶を取り出した

「水に毒は効くのかしらっ？」

小瓶の蓋を開けて、龍へとかける

音もなく龍が溶けた

「一応は魍之組へ使えていただけはある」

「毒殺はまだ続けているようじゃな 憐驪」

「……！ 何故お前等私を知っている……！」

「……そうか お前の前ではいつもこの姿ではなかったな」

「わからぬ筈じゃ」

そういつて2人は姿を変えた

蘇陰は紅髪に黄色の衣を纏った少女へ

璃陽は蒼髪に緑色の衣を纏った少年へ

「！ お前等・・・！！」

「やっとわかったか 鈍い奴め」

「主はやはり魍之には向いていなかった様じゃな」

2人の変貌した姿を見て憐驪は驚く

蘇陰が伏せていた臉をあげる

「・・・美水様」

憐驪が後ろを振り返ると、そこには出入りの時の格好をした美水が立っていた

「・・・都合が悪い 場所を変える」

それだけ言うと、美水は消えた

憐驪も追いかける

「（・・・負ける訳がない！あんな餓鬼に！私が！）」

「・・・ここは」

「奴良組から大分離れてる ここならお前だって都合良いだろ」

美水が言う

「・・・！！ その服は・・・！！！！」

美水が来ている服を見て、憐驪が驚いた

「露水様の・・・！！！！」

「・・・露水・・・？」

美水は何も知らないような顔をする

「・・・お前は知らなかったな・・・」

憐驪が呟いた

「アンタの人生もここで終わりよ！！」

死ね！！！！」

憐驪が小さな紫色の玉を投げた

美水は本能でそれを避けた

すると

「甘い！！」

「！！」

美水の首を後から玉がかすめて飛んで来た

首から血が流れる

「！！？」

突如目眩が美水を襲う

「・・・毒、か」

「御名答 正解よ どう？ 私の毒は」

「・・・アンタも、毒殺する妖怪か？」

「も？ ああ、あの貧弱鳥ね あんな貧弱と一緒にしないでよ！！」

「！！！！・・・鳩を馬鹿にすんのか」

「はっ、仲間を馬鹿にされて怒るっての？ 血の気が多い奴ね！！」

憐驪が何処に隠していたか短剣を美水に振り落とす

ガキーン！

鉄と鉄のぶつかる音

美水は簪で短剣の一撃を止めていた

「!!! なめるなあ!!!」

憐驪が二撃目を振り落とす

簪を投げ捨てると、美水はそれを避けた

「避けてばかりね!!! 私がそんなに怖いかしらっ!?!」

口が裂けるように笑みを浮かべる憐驪を見て、美水はぞっとした

「怖いっ? 調子に乗んなよ!」

美水も暴言を吐く

そして

「閻鬼八舞! 雷孔!!!」

片手を憐驪に向けると、辺りが光った

「!!!!!!」

あまりの眩しさに目を閉じると、痛みが体に広がる

「~~~~!! その技は.....」

閻鬼八舞えんきはちぶは露水様がよく使っていた技

名の通り、それには8つの属性がある

.....露水様はよく炎えんじゆつか襲華しゆかを使っていたが.....

雷孔らいこうなんて聞いた事がない

「(体が.....麻痺している.....?) その技は.....」

「閻鬼八舞、雷孔 ウチが1番得意な技 これ、燃費よくてさ」

「じゃんじゃん撃てるんだよね」

美水がもう一度憐驪に片手を向ける

「他のも見せてあげようか?」

「閻鬼八舞 水枷みずかせ!!」

「!」

片足に突如、もの凄い衝撃

憐驪は己の右足を見た
すると

右足が足枷の形をした冷たい液体に覆われていた

「痛っ……!」

右足から血が噴き出す

「それも結構便利でしょ」

美水は憐驪を木の上から見下ろした

「閻鬼八舞 炎襄華」

炎が憐驪の体を包む

そして

一斉に炎が憐驪の腹部を貫く

「うああ!!」

あまりの激痛に顔を背ける

炎はすぐ消えた

「……」

「……フッフ」

「・・・？」

「アンタ・・・ その技どう覚えたか知らないけど・・・」

「ムカツクのよ！！ そうやってあの方と同じような事言っ

同じ技使って！！ まるでアンタがあの方みたいで！！

愛されてるのはアンタじゃないわ！ 私よ！！

あの方に愛されているのは・・・っ！！」

「あの方・・・？」

「教えてあげるわぁ・・・ アンタの中にいる鬼の正体」

「！！ 鬼の・・・正体・・・？」

美水の体が強張った

嫌な汗が体から噴き出す

「アンタの中にいる鬼はね・・・ 露水って言うのよ・・・」

「露水・・・？ 誰だ 露水って・・・」

「まあ、アンタの母親はすぐ死んだから わかる筈もないわね・・・

」

「・・・母・・・親・・・？ なんでそんな話が・・・ っ！！！！」

「あら、流石に気付くかしら ここまで言っちゃあ」

「あ・・・ っあ！！」

「アンタの鬼の正体はねえ・・・」

「・・・やめる・・・」

「アンタの母親 露水よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目を見開く美水

「ハツハツ、その驚きの顔、最高だわ！」

高笑いを始める憐驪

「・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「この力は・・・・ウチの母親のものなのか・・・・・・・・」

「『どうりで・・・・・・・・』」

「驚いた？ アンタにその力は押さえられないわよ・・・・・・・・」

「『・・・・・・・・』」

「閻鬼八舞 獅子風ししかぜ」

突風が憐驪を襲った

「・・・・・・・・！ 風の攻撃・・・・・・・・ 鎌鼬みたいね・・・・・・・・」

「じゃあ、私はムチとでも言おうかしら？」

逆風が美水を包む

「・・・・・・・・ムチってことは、毒風か・・・・・・・・」
美水の腕に切り傷が入った

「『！・・！』」

「終わりよ!!」

『久しぶりだねえ・・・ 憐驪』

「!」

『アンタ、少しお痛が過ぎたんじゃないのか?』

「露水様・・・」

「露水様!!」

憐驪は美水の体を抱きしめた

「露水様!! またお会いできた!!」

・・・嬉しい・・・!!」

『・・・』

「こんな娘の何処が良いんですか!?

一緒に暮らしましょうよ・・・」

『一緒に・・・?』

「私、鬼憑ひょういの技を覚えましたの!

貴女の魂を他の者の体に鬼憑させて、一緒に暮らす事が・・・」

『・・・憐驪 私が選んだんだ この娘の体を』

「!!--!!」

『閻鬼八舞 炎襄華』

「……い」

『……』

「私を愛してくれない露水様は嫌い……」

『……』

「いらない……そんな露水様……」

『お前……』

「私を愛してくれないと……痛い目会うから……」

『……堕ちたな……憐驪』

「……」

『……お前は美水が殺るべきだね……』

「……！私はあるな娘に殺されたりしない！……」

『お前も死ぬ時わかるよ あの娘の優しさ』

「……っ」

「・・・話はすんだか？」
「アンタみたいな娘・・・！」

「死ねば良いんだ!!！」

憐驪が

短剣を振り上げた

「うあつ！」

突然の事で美水も反応できなく、左腕を刀で斬られた

左腕が力無く垂れ下がる

「・・・」

「!!（なんだ・・・その目は・・・!）」

そんな目で見ると・・・

そんな目で・・・

私を・・・

そんな・・・

哀れみの目で・・・っ！

「・・・血紅」

美水が両手を合わせる

左手の掌から柄が現れた

その柄を美水の右手が握り、一気に引き出した

現れたのは

柄も鍔も紅い血に染まった

しかし刀身は真っ白な

そんな美しい刀だった

「これは母さんの刀だったらしい・・・」

「！！！」

「魄龍が言っていた・・・」

「せめて、母さんの刀で殺してあげるよ」

「・・・そんな優しいさ、」

「いらないうって？ ウチに殺されるんじゃない 母さんに殺されるんだ」

「そう思ってくれればいい」

「！」

「いくよ……」

血紅が

音もなく振り落とされた

第十三夜：満月の夜（後書き）

・・・あー、コホンッ

こんなG D G Dな戦闘ものでした・・・

「え？これ戦闘？」とか思われた方多いんじゃないでしょうか
戦闘です

私文才まったくないので、ここまで書けたのキセキだと思います
皆さんの感想のおかげです！感想がないと

小説書けませんよ・・・（素直に感想欲しいって言えばよ

ここまで読んで下さった貴方に勇者の称号を与えます！（大真面目
ありがとうございます！！

第十四夜：霧は太陽 川は憧れ

霧は私の太陽だった

川は私の憧れだった

「 - - - - - つ ! 」

熱い

熱い

血が

流れる

痛さを感じない

血は流れているのに

「 母の名前は 」

「 ? 」

「 露水は、霧という意味だ

知ってたよ 母の事

本当は何もかもわかってた 」

「 ! ? 」

「 目を背けてた

それが事実じゃないと思いたくなかった」

「・・・露水様、の」

「？」

「名の由来は・・・？」

「・・・霧の中に光るもの

それを太陽と、魄龍は言った

誰かの太陽になれるようにと、付けられたんだ」

「・・・そう・・・」

「・・・私達も・・・

決着付けましょう・・・」

「・・・！・・・」

「・・・何？ 情けでもかけてるの？

いららないわよ そんなの

私は絶対死なない・・・」

目を見開いて言う憐驪

「・・・わかった・・・」

「終わりにしよう」

「毒霧！！」

どくぎり
毒霧が美水へと向かう

「ひょうていけん
氷帝剣！！」

血紅が青掛かった白へと変わる
柄も、鐔も、刀身も

美水は毒霧を避けると血紅で憐驪の体を斬った

「……………！！」

声もあげずに倒れる憐驪

「……………強いのね……………」

露水様も……………貴女も……………」

「……………！！」

「本当に……………強い……………」

「……………じめん」

「……………？」

「アンタからウチ、何もかも奪ってた
アンタの太陽も、希望も、夢も、望みも」
「!?!」

違う

泣かないで

違う

こんな醜い私の為に

涙を流さないで

「違う……」

希望も夢も望みも何もかも

見せてくれたのは、貴女

私は只……

「私は只……
貴女みたいに……」

憧れていた

泣きたい位に

憐驪の体が消えて行く

ゆっくりと、音もなく

「……………っ！」

美水は涙を流したまま

憐驪の手を取る

「……………優しいのね、貴女

私なんかの為に、涙を流すのね」

「……………アンタの事、見た時大っ嫌いになった
どんだん、嫌いになって来た」

「同じなんだよ」

「ウチも、アンタも」

「……………私と……………貴女が……………？」

「……………大切なものは、失いたくない……………」

「……………そう……………ありがとう……………」

憐驪が微笑んだ

今までの様に張り付く笑みではなく、心から

「……………アンタみたいな奴が、ウチの組にいれば良かったの
に……………」

「私はね、追い出されたのよ 魍之組から
露水様が死んで、すぐに」

「！」
「私自分の事はわかりだった
馬鹿よね」

「……………貴女の名前の意味は、川、だったわね……………」

「私ね、霧も川も大好きなの……………」

消えた

完全に

憐驪と言う存在が

この世からなくなった

『・・・美水様』

「・・・あぁ、蘇陰、璃陽」

「何故泣いている？」

「・・・ウチもアイツも、同じだったよ・・・」

「人の為にしか、泣けないんだよ・・・」

「ごめん、疲れた
もう寝るわ」

『はい』

美水は屋敷へと帰って行った

「・・・憐驪は、綺麗に死ねたのだな」

「・・・彼奴は、いつか小生達にこう言っていたな」

『せめて、死ぬ時だけでも綺麗に死にたいんだ』

「願いはかなったな」

「結局、美水様に屈服してしまったのじゃな」

「・・・流石だな、美水様」

「そうじゃな・・・発狂する前の露水様にそっくりじゃ」

2人の言葉は

静かな

静かな

深い森の中に

布を濡らすように響いた

第十四夜：霧は太陽 川は憧れ（後書き）

．．．．．えー．．．

ゴメンナサイぐだぐだです

もうちょっと長く終わる予定だったんですが．．．
あれ？ なんか前と話し繋がってる？ 大丈夫？

第十五夜：泣けたら（前書き）

えー・・・

その、あの、なんていいみましょうか

ディープキスが出て来ます

苦手な人、ご注意ください

第十五夜：泣けたら

今すぐ泣けたら

どんなに楽だろう

「……………」

美水は誰にも見つからないようになるべく気配と足音を消して歩いていた

こんなボロボロで血まみれの姿見たら誰だって驚くでも

1番嫌なのは

アイツに知られる事

（頼むから誰も起きててくれるなよっ……）
なるべく素早く
気付かれないように

（なんでウチの部屋はこんなに遠いんだ……！）

本気で嫌になった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「……………つ、ついた……………」

やっと部屋に戻る事が出来た美水

部屋から見える池で淳を呼ぶ

「淳」

「なんでしようかつ」

「あ、声大きい！ もうちょい小さく」

「なんでしようかつ？」

「弥穂呼んで来て」

「イエッサー！」

「声……………！」

「行って来まあゝす」

パシャン

「……………この怪我どうしようか……………」

身体中怪我だらけ

ギリギリで右目も見えていない

「……………ヤバイ、なんか痛くなってきた」

どんだん右目が軋むように痛んで来る

頬を生暖かい液体が伝う

右目から涙が流れたと美水は思ったが違った

「……………え！？」

「え、ちょ、なんで、え、血！？」

右目から流れているのは血だった

「・・・まあ、泣く意味は特にないし、無意識の内に泣き出す程ウチ女々しくねえし」

思いつきり無意識で泣いた事を棚の上に向けてるよ

「・・・つか、止まんないんだけども・・・」

止まるどころか更に出て来る

「うわゝ、これどーしょ・・・」

・・・？・・・あぁ

「これはアンタの涙だったんだね 母さん」

「泣き方を忘れたんだね だから代わりにウチが・・・」
突如

「~~~~~っ」

美水を激しい目眩が襲う

そのまま美水は倒れた

/

「・・・ 何処？」

周りには何も無い

何も無いと言っても暗くて見えないだけで
遠くの方に明るい光が見える

シャラン

シャラン

鈴の音がした

そして明かりが近くなって来る

そこには

栗色の髪の毛

まるで妓桜にでもいる様な着物を着ている女性が居た

手には提灯を持っていて

提灯の周りには黒や桃色の蝶が飛んでいる

「・・・アンタは？」

「・・・私だよ 美水

やっとまともに話が出る」

「・・・！・・・母さん・・・？」

「そうだよ 今まで苦労かけてごめんね

私の鬼が色々」

「・・・母さんの、鬼？」

「獣鬼はね、体の中に鬼を宿しているんだよ

私の鬼は乱暴で発狂してばかりだ

それがお前にも迷惑かけた」

「じゃあ、茨銅鑼の時の・・・」

『お前に話しかけたアレは私の鬼だ
茨銅鑼と話したのは私だがな』

「！・・・よかつた・・・」

『??』

「いやさ、ウチ母さんなんか見た事なかったし
もしかしてすごい狂ってる人かと思ったんだ
まともそうでした」

『あ、そう言う事か』

「何で今まで黙ってたん？」

『黙ってたんじゃなくてね、鬼が話させてくれなかったんだよ』

「鬼が・・・？」

美水は首を傾げる

『全く鬼もケチだね』

お前の力が強まったから、鬼を押しよけるだけの力を私も付けた
んだ

今や私とお前は一心同体』

「フウン・・・あ、聞き忘れてたけど、ここ何処？」

『ここはお前の精神世界だよ』

「え、マジでか あるもんだね 精神世界って

ウチの中真つ暗なの？」

『真つ暗ってお前・・・今は私とお前しかここを照らせないんだ
よ』

「照らせない？」

『結構不安定だね お前の心は

地震やらなんやらしょっちゅう起きる』

「えっ」

『いつかお前の心が晴れるとき、ここも晴れるぞ』

「・・・じゃあ、これって言うならば曇ってるの？」

『そう言う事になるね』

「心の中は曇りつて漫画みてーな話じゃな」

あ、待って 笑えて来た」

『ええっ』

露水はまるで美水と同じ年かのような反応をする

美水はその様子を見ていて、とうとう吹き出してしまった

『・・・まあ、私達は話し、感じる事で力も強まる』

「え、何、斬 刀？」

『漫画が違う！ ちょ、伏せ字意味ねえ！』

「おおっ 若々しいツツコミ！」

『コラ』

目の前にいるこの人は本当に笑わせてくれる

若々し過ぎるよ 母さん

『・・・お、弥穂が来たよ』

「マジで!？」

『今度からはここにはお前、好きに出入りできるさ』

望めば入れる』

「・・・へ・・・」

『色々聞かせてね？ 結構暇なもんさ ここも』

「ハハツ じゃ、湖でも今度作ってやるよ」

『お、有り難い』

「じゃね・・・あ、母さん」

『ん？』

「泣きたかったら、やり方思い出させてあげるよ」

『！！』

「じゃ、また今度」

美水は本の世界に戻って行った

『……有り難う 美水』

露水は端麗に微笑んだ

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「主様！」

「弥穂！」

お互いに抱き合う

「お会いしたかった！」

「そのお怪我は？ 大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ

「ごめんね 迷惑かけた」

弥穂の頭を撫でてやる

弥穂はくすぐったそうに目を細める

「さ、治します 主様、服を脱いで下さい」

「ん」

胸に巻いたサラシと短パン以外全て脱ぐ

「……倡呈凡治しょうていばんぢ」

弥穂は美水を治し始めた

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

ドタドタドタドタバツタン！グスン………ドタドタドタドタ

!!

「転けた!？」

「スイーーーーー!!!!!!」

勢い良く入って来たのは鈴だった

「鈴ちゃん・・・どしたん？」

「どしたん?じゃないよ!? 昨日勝手に一人であの憐驪とか言うの倒して来たでしょ!!!」

「あ、うん、で？」

「なんで一言も言ってくんないのさ! みーちゃんと力工も寂しそ
うだったよ!」

「ごめんごめん でもこれは自分で決着付けたかったから」

「まったくもー・・・ あ、動かないで!スイ」

「？」

「一回下見て」

「???(下を向く)」

「こっち見て!」

「え・・・」

パシヤッ

「大成功〜! こんなスイ滅多に見れないよ!

布団の中に入って流し目とか! 誘ってるようにしか「鈴ちゃん

!?!」「ニヒヒ」

「つかその写真どうすんの!? まさかアイツに・・・」

「それもある」

「・・・も?」

「写真集にして売り出すんだよ! 今回は家庭版!」

「まった 今回はってことは・・・」

地を這うように低い声

その声の持ち主を知っている美水

もの凄い汗が噴き出す

ゆっくりと後を振り向く

「……………リ……………ク……………オ……………」

「御名答　なんでまた一人で決着付けて来た？」

「また一人で」の部分強調される

「え、っど……………」

「どうした？　そんなに難しい事は聞いてねえけど？」

「……………っ」

「ん？」

怖い

もの凄く怖い

誰かこの状況どうにかしてくれ

息がし辛い

え、これウチもう過呼吸かなんかで死ぬんじゃない？

やべえめちやくちや心臓速くなつて来た

「答えられねえのか？」

「……………っ」

あ、涙出て来た

「……………ふうん？」

「……………！」

え、何その笑みめちやくちや怪しいんだが

や、マジ止めてこっち来ないで身の危険を感じる！！

「覚悟できてんのか？」

「え、うわ！？」

ドサッ

押し倒された

「ちよ、おま！」

「お前な、そんなんじや誘ってるようにしか見えねえぜ？」

「さそつ！！？」

「んなでかい声出すなよ 誰か来たらどうすんだ」

「……！！！」

「……んな警戒すんなよ

変な事はしねえから」

「……信用できねえ」

「……まあ、接吻までだけどな」

「……」

「はあっ！！！？」

「……すげえ顔」

「お、おまつ、どこまで……」

「ん？ どこまでって……」

深くするしかねえだろ お前なら」

「！！！！！」

「……いい加減警戒すんの止めるよ」

「これで警戒すんたって言う方が無理だろ！」

「……じゃあ、昨日どうして一人で行ったのか言えよ」

「……」

「言ってみる？」

「・・・なるべく誰にも見られないように、静かに死なせてやりたかったんだよ・・・」

「アイツは、自分の思いいっばいためて、自分の汚いところ知ってて、それでもまた汚くして、人に媚びるしかなくて・・・だから、アイツが汚いって知らない奴らに見せても・・・アイツが可哀想で・・・ 1番あいつを嫌いだったウチだけが、アイツの汚いところも、綺麗に死んだ所も見てやりたかった・・・」

「・・・よく言えました」

リクオが美水に口付けた

「んむう!？」

美水が目を見開く

だがすぐに目を瞑る

「んあ・・・は、・・・て、め・・・っあ」

卑劣な水音が部屋にやけに響く

舌を絡めてやれば、片方の手は布団を掴み、もう片手はリクオの胸板を叩く

だがその力はあまりにも弱々しく、簡単に手を掴まれた

歯列をなぞり、唇も舐める

「ひ、あっ んう・・・ふ あ、んっ」

美水が息苦しそうにリクオの胸板をもう一度叩いた

今度は少し強く

リクオは意味がわかってか、名残惜しそうに唇を離した

「はっ・・・はっ・・・ テメ、何しやがる！」

美水の目が酸欠のせいで涙ぐんでいる

「お前が理由を言えたから、御褒美」

「!!! どの道するつもりだったなテムエ・・・」

「当たり前」

「・・・もう少し隠すかと思ったら」

「隠してどうすんだ？」

「っ!!!」

シレッとしているリクオに苛つく美水

「それに」

「・・・？」

「お前が言っただけじゃなかったら、もっと長くやってたぜ？」

それこそお前が死にそうになるぐらい

「なっ・・・!!/!/」

わなわなと肩を震わせ信じられないとでも言うような顔で

只目の前にいる婚約者を見つめる

「・・・はぁ・・・お前」

「な、なんだよ・・・」

「無意識でそういう顔するの止める」

「あ？」

「つか、お前戦つ以外に家を出たのがどれぐらい前か覚えてるか？」

「・・・一週間前？」

「正解 出かけるぞ」

「・・・は？」

「お前、切っ掛けが無いと外出ねえだろ？」

「それは・・・」

「ほら、部屋出てるから着替えて来い」

「え、あ、うん・・・て、お前！」

「五分以内に着替えないとやるぞ」

「うっ・・・」

初めて本当にリクオの怖さを思い知った美水だった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「お前、普通怪我人外に出すかよ・・・」

美水が出て来た

黒字に白で「cruel beautyfully」と書かれた七
部丈のＴシャツに、

長いジーパンと上着を腰に巻いた格好をしていた

「・・・お前の私服を見るのは久しぶりだな」

「着るのも久しぶりだよ・・・」

舌打をしながら美水が言う

「つかウチ、あんまし動けないんだけれども？」

「動けなくなったら俺が運んでやる」

「意地でも自分で歩きます」

間髪入れずに返って来たリクオの答えに美水も間髪入れずに答える

「素直じゃねーな」

「んな事町中でされたらウチ死ぬ」

「死にはしねえよ」

「・・・ていうか、お前の私服初めて見たんだけど」

「昼の俺ならしよっちゅう見てるだろ？」

「昼はな 夜が私服着てるとなんていうか・・・」

カツコイイ

一瞬出そうになった言葉を慌てて飲み込む

「？」

「・・・なんでもない 何処行くの」

「・・・ゲーセン」

「マジ!？」

「お前好きだろ? ゲーム」

「まあ、好きだけど・・・」

「じゃ、行こうぜ」

「・・・わかった」

2人は廊下を歩き出した

不思議な事に、屋敷を出るまでに誰にも会わなかった

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「おーすげー」

「お前ゲーセン来るの初めてか？」

「お前だつて初めてだる ウチは家でやってるかな」

「で、何やりたい？」

「んゝ．．． あ、たいたつ太達」

そこにあつたのは

鼓の 人だつた

「伏せ字つて大体意味ねえよな」

「うわあ、上の漢字当てはめりゃ一発じゃん」

そう言いながら太達の前に行く2人

「曲は．．．？」

かかった曲は

チ ノのパー クトさんすう 室

「作者の趣味丸出しじゃねえかああああ！！！！」

「しかも何か太鼓の数すげえ！」

「うわ！ 鬼でやんの！？」

言いながら太鼓を叩く手は2人とも休めない

「なげえ！ フルバージョンかよ！」

「つかこれ楽譜に入ってるのか！？」

「どーせアレだ作者がやらせたただけだろうが！

ざけんな！ あ、連打」

「手えつる．．．」

『 『フルコンボ』 』

「お、鬼でフルコンボとか」

「何か楽しいかもな」

「？ お前太鼓好き？ マジ？」

「他のもやるーぜ」

「あゝ、ここ辺りだと作者の趣味がまた・・・」

部で止まっつてすぐ けるゝ狂気の優 華院

「無理だろおおおおおおお！！！！」

「どこら辺で叩くんだこれ！？」

「わかんねえ！ もう生きてる意味がわかんねえ！」

「来た」

「また鬼かよ畜生！」

「またフルかざけんなあああ！！」

「作者死ね」

私「ええっ」

『『フルコンボ』』

「奇跡だ・・・ 小説だからこそ」

「次は何だ・・・？」

いつの間にか回りにいる人も集まって来る

「すげえぞアイツ等！ 鬼でフルコンボかよ！」

「うわゝ すごい！ 曲もすごい」

「お、あの女子綺麗じゃね？」

「何で右目眼帯なんだ？」

「あ、ねえねえ、あの男子かつこ良くない？」

「うわあゝ すっごい好みなんだけど」

「髪が長いのもまた良いねゝ」

「美男美女カップル？」

鬼でフルコンボをかました美水とリクオには聞こえていなかった

下剋

「え、嘘 マジ？」

「さっきよりはマシだろ」

「イヤでもキツイ」

最後は太鼓でハモって終了

『『フルコンボ』』

「あゝ つつかれたゝ」

「腕がしびれる・・・」

「でもなんかお前すっげえ楽しそう ムカツク」

「なんでだ」

「あ、あのゝ」

「「？」」

「曲、リクエストしても良いですか？」

「え、別に・・・」

「じゃ、じゃあ、これ」

メ
ト

「お前はオタクかあああああああ！……！！！」

「叫んでる暇ねえぞ」

「無理だあ」

『『フルコンボ』』

「もうこれギネス新記録じゃね？」

「さあ」

「つかもう終わりで良いよ 疲れた」

「もうやめんのか？」

「現代っ子の基礎体力の低さをなめんなよー

お前みたいにそこまで体力ねえんだよ、ウチは 人並みより下辺りしか」

「妖混じりなのにな」

「悪かったな」

「じゃ、次何処行く」

「え、まだどこか行くの」

「………引きこもる気か？」

「スンマセン」

あーちくしょー負けた

悔し過ぎる

グウウウ

「………つ／＼／」

「………何か食いに行くか」

ウチの腹が鳴ったのを聞くとアイツは顔色1つ変えずに言った

正直恥ずかしい

死にそうなくらい

「行くぞ」

それでも差し出された手をウチは

あっさりと掴んだ

「おい」

「ん？」

「お前、そんなに食ったら夕飯食えねえぞ」

「あー・・・、じゃ、止めにしとく」

ハンバーガーとポテトを食べ終わった後、更にフライドチキンを食べようとした美水は、

それをリクオに差し出す

「お前いくつ食う気だったんだ？」

「いくつでも」

「馬鹿か」

「ねえよ」

リクオがフライドチキンを食べ終わると同時に立ち上がる

「ほら、行こ」

「・・・行きたいところでもあんのか？」

「・・・今、思い出した」

2人は歩き始めた

* / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / * / *

「・・・ここは・・・」

「・・・ここで憐驪が死んだ」

「・・・」

「・・・あいつ、ちゃんと成仏してるよな・・・」

「大丈夫だ お前に殺られたんだから」

「・・・うん」

「帰るか？」

「・・・いや、もう一個行きたいところある」

「？」

「・・・TUT YA・・・？」

「ツヤ 買いたい漫画あるから」

「好きだな・・・ 漫画」

「何か？」

「別に？」

店内へと2人は入って行った

「おー、あつた」

「なんだそれ」

「あ つき 大好きなんだ」

「ふうん」

「・・・？ あ」

「・・・」

「あいつ・・・学校の・・・」

「松井・・・？」

「あ、魍之さん!!」

「あー、ども」

「つと・・・ お前誰？」

「いいだろ 誰だつて」

「ま、まさかつ 魍之さんの彼氏っ・・・!!」

「んな訳あるか」

「よ、よかつた・・・」

「何が？」

「うっ！ いや、その・・・」

「・・・？ まあいい それより松井、何でいんの？」

「あ、ゲーム買いに来たんです」

「なんの？」

「音三」

誰にも言うなよ？（黒笑）

「は、ハイ！」

「んじゃ」

「・・・」

「ため、動けよ」

「おい」

「な、なんだよ・・・」

「ボソツ（美水に手え出したらテメエの人生終わらしてやるよ）」

「っ!？」

「じゃあな」

「なに言っただよ」

「関係ねえよ 漫画良いのか？」

「良い訳ねえよ！ 買う！」

仲が良いのか悪いのかわからない感じに話す美水とリクオ

「なんだっただ・・・？」

哀れ 松井君

第十五夜：泣けたら（後書き）

松井君は美水のクラスメイトで、

お調子者で、騒がしくて、ムードメーカーという設定です

今後もちよくちよく出て来ますので、かわいがってやって下さい

第十六夜：異変（前書き）

久々の更新です
すいません・・・

第十六夜：異変

もう本当に

ウザイわかめなんて

死ねば良いのに・・・（泣

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・おい」

「なんだ」

「あれって・・・」

「・・・だよな」

「逃げる！」

「？ 今魘之くんの声が聞こえた気が・・・」

「どうしたんですか？ 清継君」

「あ、島君 なんでもないよ」

そこにいたのは『妖怪成金わかめ』こと清継だった
美水とリクオは適当な路地裏に逃げ込んだ

「よし、お前昼に戻れ」

「・・・・・・・・・・」

「や、イヤそうな顔すんな つーかバレて困んのお前だぞ」

「俺の心配かい？」

「ち、ちが！！ お前とウチが並んで歩いてたらウチ等どんな関係かきかれんだろ！！」

「アイツにきかれたら答えるまで永遠そのままだぞ！？」

「・・・まあ、確かに」

「ほら、早く！」

「・・・じゃあ、」

「ん？」

「屋敷帰つたら、覚悟しとけよ？」

「はっ・・・！？」

「じゃ」

「ちよ、テメツ・・・！」

「・・・あれ、美水」

「・・・戻っちゃったか・・・；」

「なんか、俺の方が勝手な約束したみたいだね・・・ ごめん」

「いや、いいよ 薄々わかってたから」

「じゃ、行こうか」

「応・・・」

「あ、やっぱり魎之くんだったか！」

「もう居なくなれよお前本当お願いだから神隠しにでもあってよ一生のお願い」

「そこまで！？ 何か最近君、僕に対して態度酷くないかい・・・？」

「大和撫子と謳われたあの頃の魎之くんはどしたんだい」

「だから誰だよそんな事言ってる奴」

「お前に対して悪態つかなかった時があったかよ」

「うっ・・・」

「はいそういうこと サヨナラ」

「ちょっと待ったー！！！」

「・・・何」

「な、何だい2人してその嫌そうな顔はっ！」

「だつてやだよ」

「早く帰りたいし・・・」

「君達に話があるんだ！！ 島君、例のものを！！」

「はい！」

「あ、島 いたの」

「これを見て下さい」

「・・・何これ？」

「これはね、僕のサイトに書き込まれた掲示板の一部さ！！

ここ最近、どうやら北海道での怪奇事件が多いようなんだ」

「（・・・北海道って魍之組の領地じゃん）」

ここでちょっと説明！

魍之、魍胤、魍薇嗣、魅篋白の一族、つまり魍魅魍魎を司る一族は、それぞれ東西南北に本家があります！

魍之〓北 魍胤〓東 魍薇嗣〓南 魅篋白〓西
となっております！

美水ちゃんは北海道なんだね！（お前作者だろ

説明終了

「最近北海道では、小樽での妖怪の目撃情報が多くてね」

「（しかも本家がある街・・・）」

「詳しくはこれを見てください」

「あ、ありがと、島」

デレながらなんか恥ずかしい葛藤してる島はほっという
美水は資料に目を通す

「（毎晩悪夢を見る・・・ 神隠し・・・ は？ 金縛り？

ある一軒家が消える、その家族は全て行方不明・・・
なにコレ 一件や二件どころじゃない 軽く50件の事件あ
じゃん・・・)」

「その中の1つに、助けてほしいとメールがあつてね
せつかくだから今回の事件を全て解決してみようと思って
みんなで合宿しようと思ってさ！」

「泊まる宛あんの？」

「いざとなればホテルにでも泊まれば大丈夫だ！」

「成金」

「なっ・・・！」

「いいよ ウチの親戚の家がある」

「本当かい！？ 魍之くん！」

「うん」

「ボソツ（ちよ、美水・・・！？）」

「ボソツ（大丈夫だって 魍之の妖怪は空気よめる奴ばっかだし
みんな人形『ひとがた』になれるから

魄龍に連絡しとく）」

「ボソツ（・・・わかった）」

「で、いつ？」

「明日からにしようと思ってね！ 丁度連休だろ？」

「・・・まあね」

「みんなには実はもう連絡してあるんだ！ あとは君等だけだった
んだよ！」

「あっそ・・・」

「じゃあ、明日の午前8時に、奴良君の家の前に集合だ！」

「え、ちよっと！ 僕に許可とらないでそんな事言ってたの！？」
「勿論」

「「（コイツ有り得ねえ・・・！！）」」

「それじゃ、また明日！！」

「行こう！ 島君！」

「はい、みーちゃんとカエも仕度して！」

弥穂は本家に荷物あるよね？」

「はい」

「っーか鈴ちゃん

何故ににやけながらデジカメ？しかも一眼レフ」

「だってだってっー 本家に行くってことはっー」

「スイの花魁詞おいらんが聞けるってことでしょっーww？」

「あっ………!!」

「このデジカメは撮影機能もついているのさー!!」

科学ってすばらしいvv」

「しまった……それがあつたか……」

鈴ちゃんの美水講座！

はいどーもどーもー!!

スイはねえ、本家の中では皆に「美水様」とか「鬼姫」って言われ
ててねっ

実は鬼姫は、みんなを取り仕切る時はヤクザ言葉（あのいつつもス
イが使ってる言葉）

北海道の妖怪に対しては花魁詞って決まりがあるのさ不思議だねえ
っ（一気！

本家の新人妖怪とか、餓鬼（「がき」って読むよ その名の通りチ
ビの鬼だよ）を叱る時も花魁なのさ

はい！ 講座終わり！ またねー！！

「……やだな……」

「まあまあvv」

「主様、淳殿には・・・」

「あ、行く行く」

美水は淳の居る池へと向かった

「淳ー！！！」

「あ、美水様あ どしたんですか？」

「いや、急に人間の友達も一緒に明日から本家行く事になっちゃって・・・」

皆に人形になる事と、空気をよむ事と、屋敷の掃除する事伝えて

大至急ね」

「あ、はいはい わかりました

急ですね」

「あ、うん・・・」

淳も、池から出て人形になるんだよ？」

「はあい 人形疲れるけど頑張ります

それでは！」

ポチャン

「・・・仕度するか・・・」

部屋へと戻る美水だった

*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*

「・・・みんな、引越しじゃないんだけど？」

もの凄い荷物を抱えている鈴、光実、華慧菜、計3名

「いや、色々やってたらしいの間にかこんな・・・」

「・・・まあ、今回は飛行機で行くらしいけど・・・」

「マジ!? じゃ、もつと持って行っても大丈夫」な訳無いだる貴様「ごめんなさい・・・」

いそいそとWiiを持って行こうとしていた鈴に喝を入れる美水
「仕度終わったでしょ？ 寝よ」

「っっはい」

こうして美水、鈴、光実、華慧菜の4人は眠りについた（そりゃもうグースカと

*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*く*

「・・・寒っ」

美水が声をもらす

「東京でもこんなに寒いのにね」

北海道行ったらどうなるかなあ」

呑気に鈴が言う

「まあ・・・ 本家はあつたかいけど」

「じゃないと困るよ」

「リクオ、そろそろだよ」

「そうだね あの人達に限って遅刻はあり得ないから・・・」

「本当」

そのとき

「奴良く〜ん！！」

来てやったよー！！」

清継の声がした

「朝からウザイ！」

ドゴー！！

もんが開いて清継を迎えたのは

美水の強烈な跳び蹴りだった

「グハアッ！」

「哀れ清継は塵となり・・・」

鈴が不吉な事を呟いた

「おはよう！ みんな！」

続いてカナの挨拶が入る

「おはようカナちゃん」

「・・・はよ」

「・・・」

「おはよ」

「おはよう」

上から順に

リクオ

美水

鈴

光実

華慧菜である

ヒソツ「鈴ちゃん本当カナの事嫌いだよね・・・」

ヒソツ「だってウザイ」

ヒソツ「我慢して」

「何をこそこそ話してるんだい君達！！」

「うわわかめ復活はええ」

「わかめじゃない！」

「おっはよ美水ー！」

「相変わらずいいセンスしてんじゃない！」

「あ、巻

おはよ

「華慧菜、可愛いね！」

「え、あ、鳥居さん・・・」

「あ、ありがと・・・／／／」

「カエ、流せないとアンタ今回

混乱死するよ」

「ええ!？」

「しゅっぱーっ!」

「話まどまってねーよ!」

全員の心が1つになった瞬間だった

第十六夜：異変（後書き）

・・・、えっと

どうでしたでしょうか・・・

いまいちキャラが掴めない原作の皆様でした・・・

第十七夜：鬼姫の帰還（前書き）

久々すぎる更新すみませんアッ！

本当にごめんなさい

短いですがどうぞ！

第十七夜：鬼姫の帰還

ああ

さよなら幻想

おかえり現実

「なんで！？使おうよ使おうよー！！」

鈴の声がジェットの中に響いた

~~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

えー、Hello皆様？こちら美水

ただいま成金野郎の自家用ジェットの中でございます

「絶対使わないからね 何があっても」

何をもめてるかかって？花魁詞の件です

いいじゃない、たまには我が儘言いたいのよ

鬼姫だって人間だもの

「せつかく聞けると思ってたのにー！！」

「言つとくけどウチ花魁詞そんなすらすらじゃないんだかね！？」

いちいち話すのは面倒なわけですよ

「・・・ぷっぷのぷー・・・(#、3、)」

「何拗ねてんの」

「仕方ないよ鈴ちゃん 諦めよう」

話に入ってきたのはみーちゃん

続けてカエも入ってくる

「そうだよ鈴ちゃん スイが嫌がってるし・・・」

「むむむ・・・」

鈴ちゃんがまだ不満そうだけどほっとく

言わないと言ったら言わない

「あ、そういえばリクオ」

「ん、何？」

「・・・今回、迷惑かけるかも」

「え」

「それだけ」

これ以上は言いたくない

「ついたね」

「ついたな」

「ついたよ」

一面真っ白な白銀の世界

寒気がする

が、美水はそれ以上に何かを感じていた

「美水様——!!」

手を振ってやって来たのは淳

その腰から下にはしっかりと足が生えている

「来ましたか！」

「来たよ」

「えっと・・・彼女は？」

「ああ、わかめは誰か知らないよね」

「ちよ、」

「淳だよ、ウチの親戚」

「淳です〜よろしくお願ひします〜」

にっこりと笑う淳にみんなが好感を持った

「それでは、皆さん家にご案内します〜」

皆さん手を繋いで！」

「なんで？」

「迷子にならないようにですよ」

淳の笑顔は相変わらずだった

何か、嫌な予感がする
何かが、いる

第十七夜：鬼姫の帰還（後書き）

うへえ 駄目 駄目だ なんじゃこりゃ

次話もなるべくはやくあげたいです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6588g/>

魍魅魍魎の主と鬼姫

2010年11月17日20時19分発行